

# 〔南部〕アルザス・ドイツ語の文法記述へのアプローチ

— ミュルーズ・アルザス語方言に基づいて

Ein Versuch der Grammatik des [Süd-] Elsässischen

— auf Grund des „Milhüser Ditsch“

柴 崎 隆

Takashi SHIBASAKI

## はじめに

フランス東部の国境の地、アルザス地方の言語事情については、ドーデの作品『最後の授業』を巡る論争を契機として一時期に注目を浴びたが、この地の土着のドイツ語系方言そのものに関しては、その実態はほとんど知られてこなかった。この論文の主旨は、「戦後のフランス中央政府の言語的不寛容によるドイツ語教育の抑圧、方言蔑視の教育政策のため」<sup>1)</sup> 現在では存亡の危機に晒されていると謂われているアルザス語<sup>2)</sup>、中でもその中核を成す低地アレマン方言（上部ライン・アレマン方言）圏にあり、ストラスブル<sup>3)</sup>に次ぐアルザス第二の都市ミュルーズ<sup>4)</sup>のアルザス語（Melhüsaditsch）に焦点を絞り、隣接する諸方言との比較も踏まえてその言語的特徴を指摘し例証することにより、ゴットフリート・フォン・シュトラースブルクの『トリスタン』が書かれた13世紀の中高ドイツ宮廷詩人語の直系の後裔であり、ドイツ文学における最初のベストセラーとされるゼバスティアン・ブランドの『阿呆船』に代表されるように、16世紀にはドイツ語圏において「その文化的輝きの絶頂に達していた」<sup>5)</sup>と

まで言われる アルザス・ドイツ語方言の文法記述へのアプローチを試みる。

## 第一部

### アルザスとアルザス・ドイツ語方言に関して

#### 1. ドイツ語諸方言におけるアレマン語の現状

今日、ドイツ語圏においては方言の衰退とそれを犠牲にしての標準ドイツ語の浸透が広く認識されているが、下記のレフラー（Löf-  
fler）のドイツ語の方言知識に関する地域的分布図が示すように<sup>6)</sup>、アレマン方言圏、とりわけスイスのドイツ語圏では、こうした一般的状況に逆行するようなこれまでにない方言の活性化の現象がこの21世紀初頭に確認されている。しかしながら低地アレマン方言が主体を占めるフランス東端部のアルザス地方ではこうした趨勢とは異なり、第二次世界大戦後のフランスへの再々度の帰属以降、フランス政府が70年代まで取ってきたほぼ一世代に亘るドイツ語およびアルザス語の徹底した弾圧政策と、それと相俟って、アルザス人側のナチス・ドイツに対する嫌悪感とそれに伴うドイツ文化一般に対する忌避的感情から、こ

れまで彼らのアイデンティティの証しの要であった方言まで放棄しようとする風潮が浸透し、特にスイスに近いアルザス南部では、一まだ方言が根強く残っていると謂われるスンゴー（Sundgau）地域を除いて一、フランス語の浸透と引き換えに事実上アルザス方言消滅の危機に瀕しているといっても過言ではない状況が指摘されている。また、これまでアルザス方言の牙城であったアルザス・ワイン街道<sup>7)</sup>沿いの地域では、従来の家族や地域を中心としたブドウ栽培業の仕事を通して

アルザス方言を保持してきたのだが、最近では外国人労働者を含む外部からの労働力に依存する比率が次第に高まり、それに伴って相互の意思疎通の手段として当然のことながらフランス語が使われるケースが多くなってきているようだ。また店の中でも客と店員がアルザス語で会話をしている最中であっても、第三者が突然入店したことに気づくと直ちにフランス語に切り替えるという傾向が強いそうである。



図1. ドイツ語圏における方言知識の地域的分布〈この30年間に実施されたアンケートにおける解答者の自己判断による〉（Löffler 1994<sup>2)</sup>, S.144/König 2005<sup>15)</sup>, S.134)

## 2. アルザスにおけるゲルマン系（ドイツ語系）諸方言

アルザスという地域名称は慣用的なものであり、行政的にはストラスブール（Strasbourg）を県都とする北部のパ・ラン県（Bas Rhin）と、コルマルを県都とする南部のオ・ラン県（Haut Rhin）から成る。この両県で用いられているゲルマン系方言を我々は一般にアルザス語と呼んでいるが、実は平準化された均一な言語ではない。アグノー（Haguenau）<sup>8)</sup> 北方のドイツのプファルツ地方と国境を接するヴィッサンブール（Wissenbourg）<sup>9)</sup> 近辺の北端部と、ザール溪谷のいわゆる“こぶ状アルザス”（仏 Alsace Bossue）あるいは“湾曲状エルザス”（独 Krummes Elsass）と呼ばれるサル・ユニオン（Sar-

Union）やサーベルヌ（Saverne）<sup>10)</sup> 近辺のアルザス北西突出部では他の地域とは異なるライン・フランケン方言が話されている。これはロレーヌのゲルマン語系方言（ドイツ語方言）およびルクセンブルク語（共にモーゼル・フランケン方言）と系統的に同一であり、上位概念としての“中部ドイツ語方言（Mitteldeutsch）”の一つとみなされる点で大きく異なる。これ以外の地域は、西端部の一部のロマンス語圏（フランス語）を除いて、バイエルン＝オーストリア方言等と同じ“上部ドイツ語方言（Oberdeutsch）”に属するゲルマン系のアレマン方言ではあるが、スイスと国境を接する南端部のスングー地方（Sundgau）のみ、大部分のスイス・ドイツ語諸方言と同じ高地アレマン方言に属する。高地アレ

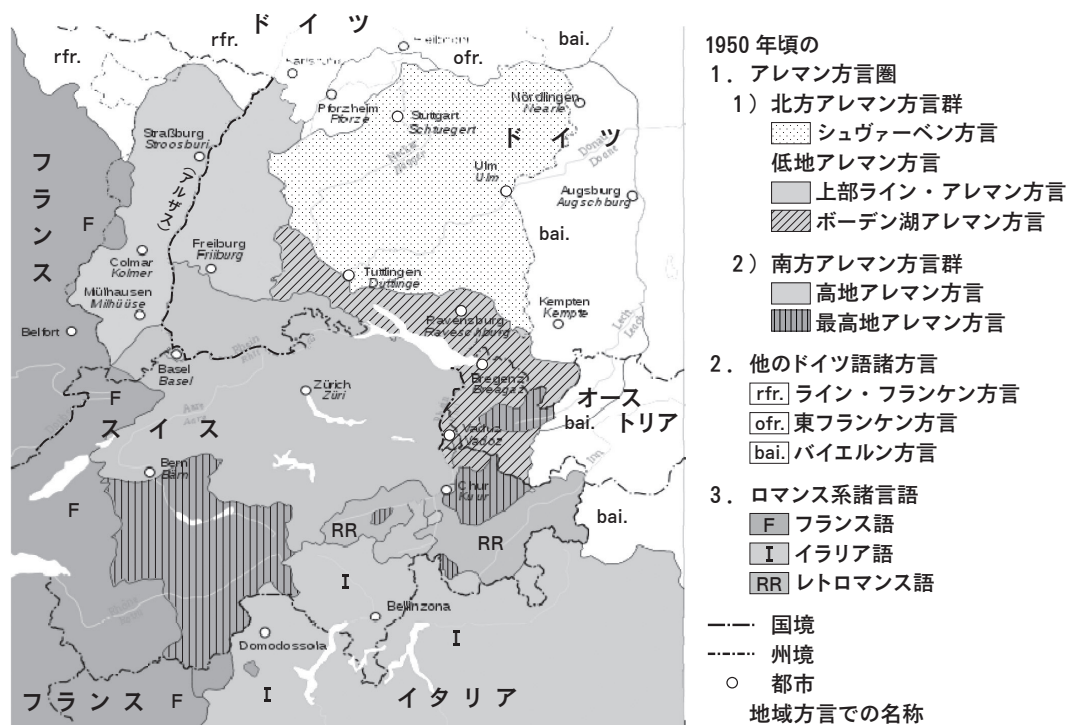


図2 （広義の）アレマン諸方言の分布図

マン方言は一最高地アレマン方言も同様であるが一、標準ドイツ語やその他のドイツ語諸方言とは異なり、語頭音の軟口蓋閉鎖音 K-まで第二次子音推移がおよんだ結果、調音点を同じくする摩擦音 Ch- [x] と発音されることで識別が可能である。（例：標準ドイツ語 kaufen “買う”，低地アレマン方言 kâife> 高地アレマン方言 chaufe/ 標準ドイツ語および低地アレマン方言 Kind “子供”> 高地アレマン方言 Chind, Ching 等）この南端部を除いた他の地域は低地アレマン方言に属するが、北部と南部の間である程度まとまった相違が観察される。なお欧州議会が置かれているストラスブールの方言は、低地アレマン方言を基盤としながらもライン・フランケン方言の特徴も一部取り入れて独自の発達を遂げた都市方言、あるいは「ある程度まではフランケン方言の飛び地」といわれている<sup>11)</sup>。（例：ライン・フランケン方言+ストラスブール方言 klaan ㊦ 北部/南部アルザス方言 klei(n) “小さい”）

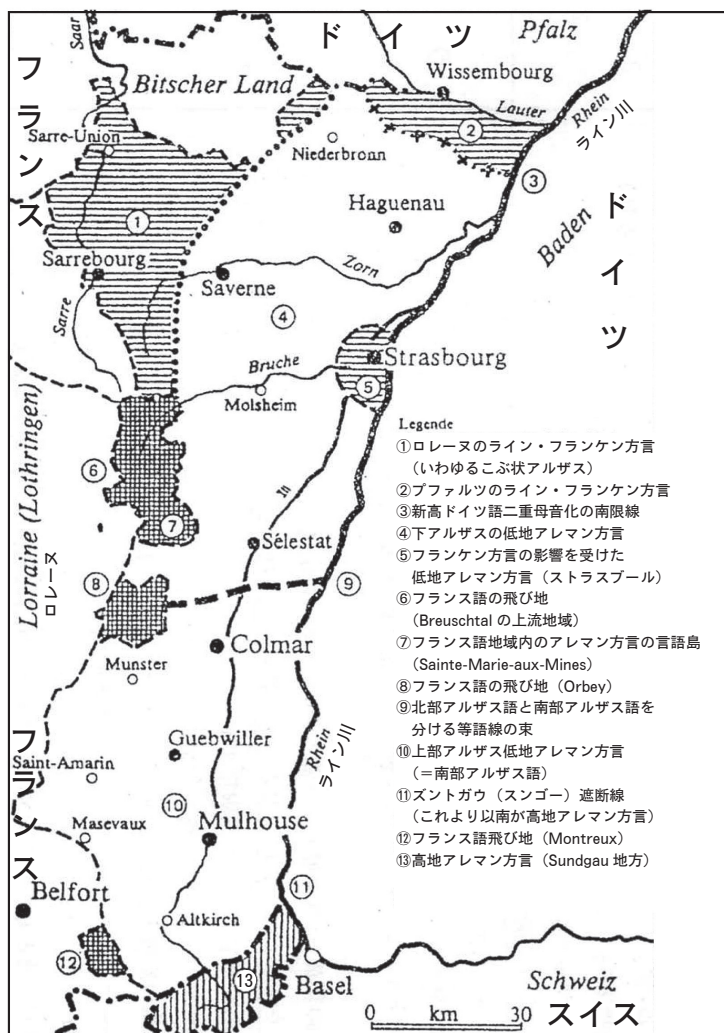
### 3. 本稿におけるアルザス語の定義と考察の対象とした地域方言の先行研究について

本稿では便宜的にアルザスで最も広く話されている低地アレマン諸方言のみを“アルザス語”として総称する。ただしそのアルザス語（ライン川左岸の低地アレマン方言）も北部（下アルザス）と南部（上アルザス）ではそれなりの相違がある。アルザスにはバ・ラン県の主都ストラスブール（Strassbourg：県庁所在地）を筆頭に比較的大きな都市（とは言っても日本の地方都市程度の規模ではあるが）が3つあり、残りの2都市はオ・ラン県のコルマル（Colmar：県庁所在地）とミュルーズ（Mulhouse）である。本稿では今回現地で入手できたミュルーズのアルザス語で書かれた2冊の資料、すなわち Willenbacher

“D’Lächkür”（以後 Wil と略す）を主体とし、さらに Troxler-Lasseaux “J’apprends l’alsacien”（以後 Tro と略す）をも加えて、すでに記述がなされているコルマルのアルザス語の文法的特徴も適宜言及しつつ、書物を通して上アルザスの南部アルザス語を学ぶ際に留意すべき特徴を標準ドイツ語と比較を通して検証するとともに、アルザス北部（下アルザス）の低地アレマン語との相違も指摘していく。

なお、これまでミュルーズのアルザス語の文法的記述に関しては、上記の Troxler-Lasseaux の書物の巻末に“文法と語彙の概要（précice grammatical et lexique）”が備わっているものの、文法を扱った部分はわずかに5ページ（内、動詞に関しては2ページのみ）しかない。しかしながらミュルーズに地理的に近い同じアルザス地方のコルマル（Colmar）の低地アレマン方言に関しては Philipp と Bothorel-Witz による “Low Alemannic” と、Weiss の一般向けの “Elsässisch — die Sprache der Alemannen” があり、またライン川対岸のドイツ領フライブルク周辺の高地アレマン方言文法に関しては、ウェブページではあるが Noth の “Eine Kaiserstühler Alemannische Sprachlehre — auf der Grundlage der Mundart von Oberrotweil” と社団法人 “学校における地域研究促進協会”（Verein zur Förderung der Landeskunde an Schulen e.V.）が編纂した “Breisgauer Alemannische Kurzgrammatik” とがある。しかし上述の Noth のものと並んで何といっても内容的・分量的に最も充実しているのはスイスにおける低地アレマン方言の飛び地であるバーゼル・ドイツ語を対象とした Suter による “Baseldeutsche Grammatik” であろう。ミュルーズはこの3都市、すなわちコルマル（仏）、フライブルク（独）、バーゼル（スイス）のほぼ中間にあり、ともに現在では文化・経済的にも国





Raymond Matzen,  
Der elsässische Sprachraum  
(Nach Linien des elsässischen Sprachatlas)

図3 アルザスにおける方言分布図

家を超えた地域共同体“Euro-Regio”を形成している。またこの地域でもっとも規模の大きな空港はスイスのバーゼルにあるが、その名称もしばらく前に“バーゼル・ミュルーズ・フライブルク空港”と改称された。

#### 4. ミュルーズ小史<sup>12)</sup>

ミュルーズ (Mulhouse) という都市名称は

フランス語であり、これはアルザス語のミルヒューザ (Milhüsa) またはメルヒューザ (Melhüsa), あるは標準ドイツ語ではミュールハウゼン (Mühlhausen) に基づいている。語源的には前半部 (規定語) の“Mühle (水車)”と後半部 (基礎語) の“Haus (家)”の古い複数3格形”から成っていると考えられ、8世紀頃さる修道院が造った製粉所に由

来し、市の紋章の「白地に赤い水車」もこの由来に基づいている。ミュルーズが初めて文獻に登場するのは9世紀初頭のこととされているが、まだこのころは集落にすぎなかったようだ。

中世都市としての出発点は13世紀にさかのぼる。このころまではアルザスには北部にわずかに宮廷都市アグノー/ハーゲナウ、司教都市ストラスブル/シュトラースブルク、修道院都市ヴィサンブール/ヴァイセンブルクの三都市しか存在しなかったが、1212年にフリードリヒ2世（フリードリヒ1世赤髭帝の孫）が神聖ローマ皇帝に就任すると、1217年にアルザス公国の帝国代官に任命されたヴェルフリン（Wölflin, Albin）は、アルザスの中部から南部にかけて次々と都市を建設していった。1217年のセレスト（Sélestat / 独 Schlettstadt）を皮切りに、1220年頃にはコルマル、さらに1230年頃にはミュルーズ、オーベルネ（Oberne / 独 Ober-Ehnheim）、ケゼルスベル（Kaisersberg）、ロサイム（Rosheim）等である。ミュルーズはこのうち1293年に都市法を制定し、1308年に帝国自由都市（Freie Reichsstadt）となる。なおこれらの諸都市はルクセンブルク家の皇帝カール4世の保護のもとで、上述のアグノー、ヴィサンブールにさらにマンステール（Münster）とテュルカウム（Türkheim）を加えデカポール（Décapole）と呼ばれる「十都市同盟」を結成した。ほぼこの時期にフェレット伯領を引き継いだハプスブルク家がアルザス南部（上アルザス）で領域支配を強めると、ミュルーズはその影響力から脱するため16世紀初頭の1515年に当時13邦から成るスイス盟約者団と同盟関係に入り、事実上スイスの飛び地となる。この関係はアルザスがフランス領となった17世紀以降も続くが、18世紀中ごろには捺染工場が造られ、従来のワイン製造業に

加え繊維工業が発達し、後にアルザス第一の工業都市と言われる基盤となる。フランス革命時にはフランス側から経済封鎖を受け経済的に困窮したばかりでなく、1795年以降は中立を国是としていたスイス自体もフランスに軍事占領され一時的にその衛星国家化したことにより、1798年にミュルーズはやむなくスイスから脱しフランス領となることを余儀なくされた。したがってアルザス諸都市の中ではフランス領となった歴史が最も浅い。（こうした経緯からオ・ラン県の県都はミュルーズよりも人口の少ないコルマルとなっているようだ。）しかしながら都市ミュルーズが飛躍的に発展するのはフランス領になりアルザスの産業革命の推進役を担った19世紀以降であることもまた忘れてはならない。この時期、宗教的にはミュルーズはアルザスでも比率が極めて低い改革派（カルヴァン派）の牙城であり、オランダと同様に”商いにおける社会的成功は神に選ばれし者の証し”と考えるこの宗派の信条こそ、ストラスブルーパーゼル間およびストラスブルーパーリ間の鉄道を敷設したケ克蘭（Kœchlin）等の企業家の主導の下で、都市ミュルーズをアルザスの工業化の牽引役としたのである。人口もフランス帰属後の約100年間で10倍以上に達し（1898年の約6千人から1910年の10万5千人）、オ・ラン県の県都コルマルを凌いでいたし、また現在でもそうである。このころはミュルーズ市民のほぼすべてがドイツ語（およびその口語形態としてのアルザス方言）を用いていたが、次章のアンケート結果（表5-2）が示すように児童の方言の言語能力を示す数値が最下位の2%という状況にあってはミュルーズのアルザス語は現在では死滅に瀕しているといっても過言ではない。

## 5. アンケート結果から見るアルザス語の危機的現状

先に述べたとおり、今日アルザス・ドイツ語方言は消滅の危機に瀕しているといっても過言ではない。年齢層が低くなるに従ってアルザス語の能動的言語能力は言うも及ばず、受動的言語能力においてさえ著しい低下が報告されている。ヴェックマンとフィンクが指摘しているように（In dieser Sprache, S.112 u. S.127）、20世紀中頃の調査によると、アルザス人のなんと90%以上が、また、今から30年ほど前の80年代初頭では70%もの住民がアルザス語を話すことができたようだが、90年代初頭の以下の数値は、21世紀におけるアルザス語の展望に関して決して我々を安堵させるものではない。最近の現状をヘルフリッヒ（Helfrich, Uta '99）の研究報告に従い、アルザスにおける（ドイツ語）方言使用のアンケート結果を以下に紹介したい。

### 5-1. "INSEEアンケートによる方言使用(1979年)"

（Dialektverwendung nach der INSEE-Umfrage von 1979）

県	全体	家	買物	役所
低地ライン	77%	63%	55%	41%
高地ライン	73%	55%	47%	32%

### 5-2. “就学前児童および基礎学校児童における方言の言語能力（1993年）”

（Dialektkompetenz bei Vorschul- u. Grundschulkindern 1993）

[1993年に個々の学区の教育委員会が実施]

地域	方言区分	
ヴィッサンブール (Wissembourg/Weissenburg)	ラインー フランケン 方言	54%
アグノー (Hagenau/Hagenau)	低地アレマン 方言	43%

オーベルネ (Obernai/Ober-Ehnheim)	低地アレマン 方言	28%
ストラスブール都市部 (Strasbourg/Straßburg)		5%
コルマル都市部(Colmar)		4%
タン, ゲヴィレール(Thann, Guebwiller/~, Gebweiler)		7%
ミュルーズ (Mulhouse/Mühlhausen)		2%

### 5-3. ヴィッサンブールとその近郊の高校生に対するアンケートより

なお、下記のと表で“進学校”としているのは、大学進学を目指す生徒が通う“普通教育課程リセ（lycée general）”のことであり、“職業高校”としているのは“職業教育リセ（lycée professionnel）”のことである。

#### 1) 両親と祖父母の言葉

相互の言葉	フランス語		アルザス語	
高校の種類	進学校	職業高校	進学高	職業高校
両親と	33,8%	49,1%	92,2%	87,7%
祖父母と	6,5%	13,7%	98,7%	88,2%

#### 2) 方言の言語能力（Dialektkompetenz）

方言の言語能力		進学校	職業高校
受動的 (聞き取る能力)	容易に	94,9%	68,4%
	苦勞して	5,1%	21,1%
	ほとんど不可	—	10,5%
能動的 (話す能力)	容易に	66,7%	53,6%
	苦勞して	26,9%	14,3%
	ほとんど不可	5,1%	17,9%

#### 3) 誰とアルザス語を話すのか？

{“普通に（généralement）”と“頻繁に（moitié du temps）”を足した数値}

	進学校	職業高校
祖父母と	83,05%	57,6%
両親と	56,9%	41,3%
兄弟姉妹と	40,1%	22,8%
学校の友人と	12,7%	22,8%
村の友人と	29,1%	35,1%

## 第二部

### ミュールーズ・アルザス語の文法的特徴

#### 5. 南部アルザス語の音韻特徴 (ミュールーズ方言を中心に)

多くの場合、アルザス語の語彙は(ルクセンブルク語等とは異なり)標準ドイツ語との音韻的・形態的類似性が高いため、その意味を取るのにさほど苦労を要しないことが多い。しかしながら、標準ドイツ語のベースとなった東中部ドイツ語方言とは異なる点も少なからず存在する。以下でアルザス語を含むアレマン諸方言を特徴づける最も顕著な音韻的特徴である中高ドイツ語の長母音および二重母音の保持を含め、その他の重要な音韻的特徴を標準ドイツ語の基礎的知識を有する者が(南部)アルザス語で記された資料を読み解く際に、つまずき易いケースに限って述べていく。

##### 5-1. 母音

##### 1) 中高ドイツ語の二重母音の維持 (スイス・ドイツ語方言と部分的に共通)

標準ドイツ語の長母音 -u- [u:] の起源である中高ドイツ語の二重母音 -uo- は、北部アルザス語では -ue- [uə], 南部アルザス語では前舌母音化した -üe- [yə] として現れ、その二重母音としての性質を維持している。

標準ドイツ語: Schule (学校),  
gut (良い),  
suchen (さがす)

中高ドイツ語: schuole  
guot  
suochen

南部アルザス語: Schüel  
güet  
süeche

その他の例: Müetter (母: Mutter), Brüeder  
(兄/弟: Bruder), Hüeschte (咳: Husten),  
Blüeme (花: Blume)

さらに中高ドイツ語の二重母音 -ou- (>新高ドイツ標準語 -au-) は, Zeidler/Crévenaut-Werner (s.110) によると [äi] として現れる。これを IPA 表記に置き換えれば [øi] または [ai] となろう。Troxler-Lasseaux はこの音に対して „äi“ という表記を充てているが, Wiltenbucher はおそらく語源を意識してだと推測できるが, „au“ または „aj“ と表記している。(但し希に „au“ を用いているケースもあるが, これは誤植と取ることもできよう。)

標準ドイツ語: Baum (木)  
kaufen (～を買う)  
glauben (～と思う)

アルザス語: **B**auim  
kaife  
glaiwe

その他の例: laife (歩く: laufen),  
zaiwre (魔法を使う: zaubern),  
Haiptstross (メインストリート:  
Hauptstraße), Aigscht (八月: August),  
ただし例外として標準ドイツ語の auch (～もまた) に相当する副詞は, 語末子音の -ch の脱落を伴い oi と表記されている。

2) 中高ドイツ語の長母音 î [i:], û [u:], iu [y:] の維持と一部の語彙における短母音化  
シュヴァーベン方言を除く狭義のアレマン諸方言は, 北方の低地ドイツ語と同様に12世紀よりオーストリア南部のケルンテン地方およびシュタイアーマルク地方より始まった新高ドイツ語の二重母音化の影響を被らなかった。したがって中高ドイツ語の長母音 î [i:]



を保持してはいるが、中高ドイツ語の *û* [u:], *iu* [y:] に関しては、それぞれ南部アルザス語において生じた二次的な音韻変化により、[u:] は前舌母音化した *ü* に、[y:] は非円唇化した *i* [i:] へとさらなる変化を遂げている。

標準ドイツ語: Wein (ワイン)  
braun (茶色の)  
heulen ([人が]大声で泣く)

中高ドイツ語: Wîn  
brûn  
hîulen

南部アルザス語: Wi [i]  
brûn  
hile

その他の例: **di** (君の〜: dein), **lide** ([病気に] かかっている: leiden); **Mül** (口: Maul, Mund), **düre** (続く: dauern); **dir** (高価な: teuer), **nin** (九: neun)

かつて Keller (S. 121, 2-2, (2)) は北部アルザス語のバール (Barr) 方言の音韻記述において、上記の高舌 (調音点の高い) の長母音 [i:] (<中高ドイツ語 *î*, [i:], *iu* [y:] より) および [y:] (<中高ドイツ語 *û* [u:] より) が以前の無声閉鎖音および無声摩擦音の前で短音化する現象を記述しているが、南部アルザス語においても同様な音変化が広く観察される。

標準ドイツ語: Zeit (時)  
heute (今日)  
Haus (家)  
Laut ([声が] 大きい)

中高ドイツ語: zît [tsi:t]  
hiute [hy:tə]  
hûs [hu:s]  
lût [lu:t]

南部アルザス語: Zitt [zit]  
hit(te) [hit(ə)]  
Hüss [hys]  
lütt [lyt]

その他の例: **wit(t)** [vit] (広い: weit), **Zitung** [tsɪtʊŋ] (新聞: Zeitung), **ditsch** [ditʃ] (ドイツ[語]の: deutsch) **Lit(t)** [lit] (人々: =Leute), **suf(f)er** (清潔な: sauber)

### 3) 非円唇化

標準ドイツ語の短母音 *ö* [œ], *ü* [y] はそれぞれ非円唇化 (Entrundung) により *e* [ɛ], *i* [i] として、また中高ドイツ語の二重母音 *üe* (標準ドイツ語では長母音 *ü* [y:] に発展) も、やはり非円唇化によりは *ie* [iə] として現れる。

標準ドイツ語: möchte (〜したい)  
für (〜のために)  
grün (緑色の)

南部アルザス語: mecht  
fir  
grien (<中高独 grün より)

なおアルザス語の動詞 **riefe** (呼ぶ)、形容詞 **riewig** (落ち着いた) は、それぞれ中高ドイツ語の **ruofen** (>標準ドイツ語 **rufen**), **ruowec** (=標準ドイツ語 **ruhig**) の語幹母音の前舌化という音韻変化を被った異形態 **rüefen**, **rüewic** に起源を有し、後に非円唇化したと考えることにより説明できる。

### 4) 短母音 *e* [ɛ] の調音点の下方移動による *a* [a] または [a:] への変化 (南部アルザス語)

中高ドイツ語の短母音 *ɛ* [ɛ] (標準ドイツ語 [ɛ] または [e:] へと発達) は、南部アルザス

語では調音点が下がり前舌の明るい a [a] (閉音節) または [a:] (開音節) として現れる。本稿では Willenbucher に倣い, この音に à の表記を用いることとする。(これに対して北部アルザス語では標準ドイツ語と同じ -e- [ɛ] または [e:] を維持している)

標準ドイツ語: er (彼) essen (食べる)  
lesen (読む)  
schnell (速い)

中高ドイツ語: ər ɛʒən  
ləsen snəl

南部アルザス語: ər ässe  
ləse schnəll

その他の例: **hàlfe** (手伝う: helfen),  
**dànke** (考える: denken), **sàh** (見る: sehen), **Wàlt** (世界: Welt), **Hàrz** (心: Herz), **Àngel** (天使: Engel), **gàrn** (好んで: gern), **ràchts** (右へ: rechts), **schlàcht** (悪い: schlecht),

## 5-2. 子音

### 1) 語末音 -n の脱落

([シュヴァーベン方言を含む] 広義のアレマン諸方言の一般的な音変化)

アルザス語の北部・南部を問わず他のアレマン諸方言と同様に, 一般に語末の -n- は脱落する。この現象が最も顕著に確認されるのが動詞の不定詞と直接法・複数統一人称語尾, それと強変化動詞の過去分詞である。すなわちこれらにおいては標準ドイツ語の語尾 -en はアルザス語では一般に -e として簡略化されて現れる。ただアルザス中部ではコルマールを中心に南はミュルーズ北部, 北はセレスト南部まで若干音質が変わった -a となっている。今回使用したテキストでは, Troxler-Lasseaux のものが一般に語尾

-a を用いているが (ただし一部に -e も併存) Willenbucher のものは同じミュルーズ方言と謳っているものの, 語尾 -e で統一している。

標準ドイツ語: sitzen (座っている)  
bekommen (得る)  
aufmachen (開ける)

南部アルザス語: sitze  
bekumme  
ufmache

また, 動詞に限らず他の品詞にも当然ながら語末の語尾 -n の脱落が確認できる。

標準ドイツ語: mein (私の～)  
man (人は)  
schon (すでに)  
nein (いいえ:)

南部アルザス語: mi  
me  
schu  
nei

その他の例: **vu** (～から: von), **dri** (その中に: drin), **allei** (一人で: allein), **sewe** (七: sieben), **ze** (十: zehn), **gege** (～に対して: gegen), **klei** (小さい: klein), **owe** (上で: oben), **ewe** (たった今: eben), **Rhî** (=ライン川: Rhein)

さらに, この現象は南部アルザス語では複合語においても現れ, その場合に判読が難解になることもあるので注意を要する。

標準ドイツ語: ein|kaufen (買物をする)  
an|rufen (電話する)  
an|fangen (始める)

南部アルザス語: i|kaufe

ariefe

afänge

その他の例：i|schanke (酌をする：ein|schenken), i'glade (招待された：eingeladen), ag'halte (止められた：angehalten), Igang (入口：Eingang), Ikeif (買い物「複数」：Einkäufe)

ただし、形容詞 **klei** (小さい：klein) は語尾を伴う場合に元来存在した -n- が復活する。

例：**nit as kleiner Lecher** (=nichts als kleinere Löcher) [Wil., S.59m.]

また、一部の単語においては語末の -n が省略されないものも幾つか存在する。

例：**in** (中で/中へ：in), **scheen** (美しい：schön), **grien** (緑色の：grün), **nin** (九：neun)

## 2) 母音連続 (Hiatus) 回避のための -n- の挿入 (スイス・ドイツ語諸方言と共通)

但し自由に -n- が挿入されるわけではなく、接続詞 **wu** および **wie** の後に人称代名詞や不定冠詞が、また動詞の現在複数形に2人称の人称代名詞 **ihr/Ihr** が後続するケースが一般的であり、その他のケースとしては "solch" の意味の **so-n-e** (=nhd. so ein ~) や、**vu-n-ere** (=nhd. von einer), **wage-n-ere** (=wegen einer) など一部の前置詞と不定冠詞の女性・3格形との融合形に限られているようだ。

例：

・**Wu-n-r g'heert hat, dass'me in Ångland links fahrt uf de Strosse,...** [Will., S.65u.]

(=Als er gehört hat, dass man in England auf der Straße links fährt,...)

„イギリスでは左側通行だと彼が聞いた時…”

・**Jetz, wu-n-ich vorig heim kumme bin, so**

**merk ich, dass ...** [Will., S.55u.]

(=Jetzt, als ich vorhin nach Hause gekommen bin, so ...)

„さっき家に帰ってきた時に気づいたのですが…”

・**Wisse-n-Ihr jetzt, wer Eich die Karte geschickt hat?** [Will., S.51o.]

(=Wissen Sie jetzt, wer Ihnen die Karten geschickt hat?)

„誰があの入場券をあんたに送ったのか、これでわかったかい?”

・**So-n-e Operation han ich schu 53 Mol unternumme.** [Will., S.64o.]

(=So eine Operation habe ich schon 53 Male unternommen)

„そんな手術だったら、もう53回もやってきたけどね。”

## 3) 音節末 -st (-) > -scht (-) への推移

ドイツ語圏南西部に広く観察される音変化であり、今日では南東部の一部 (オーストリア) にまで浸透している。アルザスでは北部・南部を問わず広く浸透している。

標準ドイツ語： zuerst (はじめに)  
Samstag (土曜日)  
nächst (次の)

南部アルザス語：**zerscht**  
**Samschtig**  
**nàchscht**

その他の例：**Angscht** (不安：Angst), **Dur-scht** (喉の渇き：Durst), **Hüeschte** (咳：Husten), **koschte** (値段が～する：kosten), **sàlbscht** (自分自身：selbst), **Schweschter** (姉/妹：Schwester), **sunscht** (そのほかに：sonst), **Wur-scht** (ソーセージ：Wurst) 等

#### 4) 母音間の -b- の -w- への摩擦音化 (アルザス語固有の現象)

標準ドイツ語の語中の有声閉鎖音 -b- (<中高ドイツ語 -b-) は, アルザス語では北部・南部を問わず摩擦音 -w- として現れる。なおこの音価は Zeidler/Crévenat-Werner (S.113) によれば有声唇歯摩擦音 [v] であり, 有声両唇摩擦音 [β] ではないようだ。

標準ドイツ語: aber (しかし)  
sieben (七)  
Leben (人生; 生活)

南部アルザス語: awer  
sewe  
Làwe

その他の例: Arwet (仕事: Arbeit), Fiawer (熱: Fieber), Nàwel (霧: Nebel), nàwe (〜の隣に: neben), owe (上で: oben), liawer (より好んで: lieber), iwer (上方で/へ: über), ewe (まさに: eben)

#### 6. ミュルーズ・アルザス語の全般的特徴の概観 (動詞以外)

##### 6-1. 不変化の関係代名詞 wu (=wo) (アレマン諸方言に共通する現象)

◆ S'Gigitte nimmt si Suhn mit, wu<sup>1</sup> zum erschte e Oper gsiht. [Wil., S.18u.]

(=Gigitte nimmt seinen Sohn mit, der zum ersten Mal eine Oper sieht.)

“ジジットは初めてオペラ観劇する自分の息子を連れて行く。”

◆ Was han Ihr in dàm Loch welle verstecke? Ebbis, wu<sup>4</sup>-n-r g'stohle han? [Wil., S.77u.]

(=Was haben Sie in diesem Loch verstecken wollen? Etwas, was Sie ges-

tohlen haben?)

“あなたはこの穴に何を隠そうとしたのですか? あなたが盗んだものですか?”

◆ Emol die Resser, wu di Papa bim Tiercé druff setzt. [Wil., S.29m.]

(=Einmal die Pferde/Rösser, auf die Papa ... setzt.)

“そういえばパパが3連勝式 [馬券] で賭けた馬がそうだったわね。”

◆ Heer Gæsti, dü, wu<sup>1</sup> so g'scheit wittsi un alles weisch, ka[h]sch dü mir vil-licht sage, wer dr Hartmann Martin isch? [Wil., S.179o.|s.a.S.197o.]

(=Hör Gest, du, der so gescheit sein willst und alles weiß, kannst du mir vielleicht sagen, ...?)

“ねえジェステイ。おまえはとってもお利口さんでいたくって、何でも知っているのだから、ハルトマン・マルタンという男が誰なのかを教えてくださいませんか?”

但し, この wu はもちろん疑問副詞 (=nhd. wo), 関係副詞 (=nhd. wo, als), 従属統詞 (=nhd. nachdem, wenn; als) としても用いられる。

・ Wu isch'se denn? [Wil., S.134m.] (= Wo ist sie denn?)

“彼女はいつたどこにいるの?”

・ i'me Restaurant, wu vil ditsche Tourishte verkehre. [Wil., S.210m.]

(=in einem Restaurant, wo viel deutsche Touristen verkehren)

“多くのドイツ人観光客が出入りするあるレストランで”

・ Wu-n-r zu dàm in s'Zimmer kummt, so.. [Wil., S.42u.]

(=Wenn er zu dem/ihm ins Zimmer kommt, so ...)

“彼が部屋に入ってその男のところへ行くと…”

## 6-2. 前置詞 *in* を用いた迂言的与格（3格）形（低地アレマン方言に共通する現象）

Weiss (S.35) は3格（与格）に関して、アルザスの大抵の方言でそれは単独ではもはや用いられず、*in* をはじめとして *mit*, *vur*, *an*, *nah*, *bi*, *wæja* 等の様々な前置詞が先行すると指摘しているが、アルザス全域を対象とした Zeidler/Crévenat-Werner (S.60, S.91 f.) やコルマールを扱った Philipp/Bothorel-Witz (S.321), さらに北部アルザスのパールを扱った Keller (S.137) では *in* のみしか言及されていない。ミュルーズのアルザス語でも今回の調査では *in* 以外の前置詞と3格（与格）の組み合わせは見出されなかった。また *in* に関しても、採取した用例のうち圧倒的多数が *in* と定冠詞の男性・中性の3格 *em* (=nhd. *dem*) の融合形である *im* である。これに対して複数形 (*in de*~) のケースは極めて稀であり、また女性形 (*in d'r*~) は偶然であると考えられるが皆無であった。不定冠詞の男性・中性の3格 *eme* (=nhd. *einem*) との融合形 *im'e* または所有代名詞や無冠詞などと結びつくケースもあまり見出されない。なお標準ドイツ語と異なって、アレマン方言は（バイエルン＝オーストリア方言と同様に）人名に定冠詞を付することが一般的であり、とりわけ女性〔の名前〕はアレマン語では文法性として中性扱いとなるため、人が対象となる場合に3格形はすべからく *im*~ という形式となる。

なお、この用法の起源に関して一つのヒントを提供しているのが Suter (S.73) の指摘

である。それによるとバーゼル・ドイツ語の男性・中性の単数3格の定冠詞 *em* (<mhd. *dēme*) には *im* という別形が存在することが述べられているが、それが前置詞と誤解されたために、“よく耳にするものの粗野な印象を与える”とされる女性・単数・3格の“*in der* ~”という形式（例：I sag s *in der* Mamme=nhd. Ich sage es [*der*] Mama）を生み出したのではないかと指摘している。

1) 定冠詞：*im* + [身分・職業を示す] 普通名詞の例 (nhd. *dem* に該当)：

◆ *Gescht z'Owe han ich im Portier<sup>3</sup> gsait.*  
[Wil.,S.190u.]

(=Gestern Abend habe ich dem Portier gesagt.)

“昨晚、私はドアボーイに言いました。”

◆ *D'r alte Theophil lüegt e Rung im Pianischt<sup>3</sup> züe.* [Wil.,S.162o.]

(=Der alte Theophil sieht eine Zeit lang dem Pianisten zu.)

“年取ったテオフィルはしばらくの間ピアニストを眺めている。”

2) 不定冠詞：*im'e* + 普通名詞の例 (nhd. *einem* に該当)：

◆ *D'r Herr Gault zeigt sine Apothek<sup>4</sup> im'e Berüefskolleg<sup>3</sup>.* [Wil.,S.58u.]

(=Herr Gault zeigt einem Berufskollegen seine Apothek.)

“ゴール氏は同僚に自分の薬局を見せる。”

◆ *Wu dà Fakir uf d'Szene kummt, rief't'r im'e Mäidle<sup>3</sup>, wu in de erschte Reihe g'sässe isch.* [Wil.,S.31o.]

(=Wenn der Fakir auf die Szene kommt, ruft er das Mädchen/[南部]dem Mädchen, das in der ersten Reihe gegessen hat/[南



部]ist.)

“魔術師が舞台へ上がると、最前列に座っていた女の子を呼び寄せます。”

3) **in + de** (定冠詞・複数) の例 (nhd. denに該当) :

◆ **Dàm Dissi<sup>3</sup> si Nawel<sup>1</sup> isch jo 20 cm tiefer as in de andere Mensche<sup>3</sup> ihrer!**  
[Wil.,S.70u.] {メモ: Dissi, Dyssi は Schampedyss (<Jean-Baptiste) の短縮形 (=Der Nabel dieses Kerls ist ja 20 cm tiefer als der von den anderen Menschen.)  
“なにしろこの男の臍は、他の人のものよりも20cmも深いのですから。”

◆ **Edith, ich duld nit, dass'me in de Kunde<sup>3</sup> sàit** <das haben wir nicht>. [Wil.,S.186o.]  
(=..., ich dulde nicht, dass man den Kunden sagt...)  
“エーディット。「それは当店では扱っておりません」とお客に言うのには私は堪えられないよ。”

4) **in + 所有代名詞** の例 :

◆ **E Vater verlist ... in sim Suhn<sup>3</sup> d'Levite<sup>4</sup>.**  
[Wil.,S.133u.]  
(=Ein Vater [ver]liest ... seinem Sohn die Leviten.)  
“ある父親が自分の息子を厳しく叱る。” {原義は “旧約聖書のレビ記を読み上げる”}

5) **in + 無冠詞** の例 :

◆ **Kumm jetz, dà ka[h]sch in andere<sup>3</sup> verzehle; das merkt kei Mensch.**  
[Wil.,S.162u.]  
(=komm jetzt, da kannst du anderen erzählen: das merkt kein Mensch.)  
“さあ、なら人に言えればいいじゃない。”

誰も気がつかないわよ。”

6) **im + 人名 (男性)** の例 :

◆ **Dr Dokter<sup>1</sup> git im Louis<sup>3</sup> d'Resultate<sup>4</sup> vu dr Untersüechung bekannt.** [Wil.,S.43o.]  
(=Der Arzt/Doktor gibt Ludwig die Resultaten von der Untersuchung bekannt.)  
“医者はいに診断の結果を知らせます。”

◆ **Wia heißt im Tommy<sup>3</sup> si Hund<sup>1</sup>?**  
[Tro.,S.50o.]  
(=Wie heißt Tommy's Hund/ [ 俗 語 ] Tommy sein Hund?)  
“トミーの犬はなんという名前なの?”

◆ **Milhüser Stadttheater, wu im Verdi<sup>3</sup> si Troubadour<sup>1</sup> g's[ch]pihlt wird.**  
[Wil.,S.111o.]  
(=Mühlhausener Stadttheater, wo Verdis Troubadour gespielt wird.)  
“ヴェルディの『トゥルバドゥール』が上演されているミュルーズの市立劇場”

7) **im + 人名 (女性)** の例 :

◆ **Ich will doch emol in Niederbronn ariefe, fir z'wisse, wie's eigentlig im Amélie<sup>3</sup> geht.** [Wil.,S.114u.] (=Ich will doch einmal in Niederbronn anrufen, um zu wissen, wie es eigent-lich Amelie geht.)  
“ところでアメリーがどうしているのか知るために、一度ニーダーブロンに電話してみようと思っているんだ。”

### 6 - 3. 単数・男性における格の融合

男性・単数において格の融合が生じ、低地アレマン方言の南部では4格の den の形態と機能は1格の **d'r** (<der) に、北部では逆に1格の der が4格の de (<den より) に吸収

された。すなわちコルマール、ミュルーズが位置するアルザス南部やライン対岸のフライブルク周辺のブライスガウ地方では冠詞類や形容詞の男性・単数・4格の強変化語尾は-enではなく、1格と同様の-erとなる。したがってこの地域では性・数にかかわらず1格（主格）と4格（対格）は全て同形となるため、標準ドイツ語よりも格体系が簡素化され学習しやすい。

◆ **Kann i in d'r Hieners[ch]tall geh?**

[Tro., S.78u. | s.a. S.26/S.27/S.62 usw.]

(=Kann ich in den Hühnerstall gehen?)

“鶏小屋に入ってもいい?”

◆ **Ich müess mir<sup>3</sup> unbedingt e anderer Dokter<sup>4</sup> süeche.** [Wil., S.52o. | s.a. S.70u./S.264m.]

(=Ich muss mir<sup>3</sup> unbedingt einen anderen Doktor<sup>4</sup>/Arzt<sup>4</sup> suchen.)

“絶対に別のお医者さんを探さなくちゃね。”

◆ **Dà kummt jeder Morge mit'm Velo in dr Dienscht.** [Wil., S.17o. | s.a. S.100u./S.98o./S.35u./S.187m./S.116m.]

(=Der kommt jeden Morgen mit dem Fahrrad in den Dienst./あるいはgeht ... zum Dienst)

“そいつは毎日自転車で行っている。”

## 6-4. アルザス語に特有の従属接続詞の用法

### 6-4-1. 形態的に標準ドイツ語に対応するものがないアルザス語独自の従属接続詞

1) **fir dass**: 意味的に標準ドイツ語の“damit”に対応

◆ **Mame, ich mach Puder in's G'sicht, fir dass ich oi scheen bin.** [Wil., S.24m.]

(=..., damit ich auch schön bin.)

„ママ。僕も美しくなるために顔にパウダー（おしろい）を塗っているんだ。”

◆ **..., fir dass d'ganze Wält erfährt, wie sie die lange Zitt dert owe verbrocht han.** [Wil., S.264m.]

(= ..., damit die ganze Welt erfährt, wie ...)

„世界中が、彼らが上で (=人工衛星で) 長い間どんなふうに過ごしてきたのかを知ろうとして...”

◆ **..., fir dass's nieme heert.** [Wil., S.235u.]

(= ..., damit es niemand hört)

„誰にもそのことを聞かれないように...”

◆ **..., fir dass mir nit züe wuschplig wäre.** [Wil., S.267u.]

(= ..., damit wir nicht zu unruhig werden)

„私たちが過度に不安にならないように...”

2) **sither dass**: 意味的に標準ドイツ語の“seit, seitdem”に対応

ちなみに形態的に対応する標準ドイツ語の“seither”は一般に副詞としてのみ用いられ、従属接続詞としては使用されない。

◆ **Was tribt Ihre Schwoger, sither dass [är] pensioniert isch?** [Wil., S.36m.]

(=Was treibt Ihr Schwager, seit [dem] er pensioniert ist?)

„あなたの義理のお兄さんって、定年退職してからは何をしているのですか?”

◆ **Sither dass mir d'r Diriger Marcel, unser Metzger, kei Kredit meh macht, ...** [Wil., S.84m.]

(=Seit [dem] mir Diriger Marcel, unser Metzger, keinen Kredit mehr macht, ...)

„肉屋のディリガー・マルセルが私にはもう掛け売りをしなくなってから...”

◆ **Awer sither dass är mir si Schüelzeugnis gezeigt hat, do bin ich beriewigt.** [Wil.,

S.163m.]

(=Aber seit[dem] er mir sein Schulzeugnis  
gezeigt hat, [da] bin ich beruhigt.)

„でも、息子が私に通知表を見せてか  
らというもの、安心したんだ。“

3) **nit dass** : 意味的に標準ドイツ語の “damit  
+否定詞” に、またアルザス語で一般的な  
“fir dass +否定詞” に対応すると考えられる  
が、これと比較すると用例はわずかに2例  
のみしか見出されず、さらに今後の検証が  
必要となろう。

◆ **Gang riewig, Kind, nit dass di Brief-  
kaschte ungeduldig wird!**

[Wil., S.116o.]

(=Geh ruhig, Kind, damit dein Briefkasten  
nicht ungeduldig wird!)

„お前の郵便ポスト (ここでは„恋人“の  
もじり) がイライラしないように安心し  
て行っておいで!“

◆ **... nit dass dü friejher heime kàmsch.**

[Wil., S.251o.]

(=..., damit du früher nicht nach Hause  
kommst [文字どおりにはkämest].)

„あなたが早く帰宅しないように...“

4) **vor dass** : 意味的に標準ドイツ語の  
“bevor, ehe” に対応

アルザス語で一般的な “bevor dass” に対応  
すると考えられるが、これと比較すると用例  
はわずかに3例しか見出されず、これも今後  
の検証が必要となろう。

◆ **Vor dass dà Kàrle s'Mül ufg'macht hat,  
so sàit si schu: Ihr brüche mir gar nit  
verzehle. [Wil., S.76u./s.a.S.273o.]**

(=Bevor der Kerl den Mund aufgemacht  
hat, so sagt sie schon: Sie brauchen mir  
gar nicht zu erzählen.)

„その男が口を開く前に、彼女はすぐ  
に言います。「あなたは私に語って聞  
かせる必要は全くないですよ。“

◆ **Awer wieso kenne Sie schu unser Ta-  
gesmenü, vor dass Sie d'Karte gsàh  
han? [Wil., S.211m.]**

(=..., bevor Sie die Karte gesehen haben?)

„でも、どうしてメニューを見る前に、  
もう本日の定食を知ったのですか。“

## 6-4-2. 余剰の dass

標準ドイツ語においては文法的に通常は必  
要のない場合に、ミュルーズ・アルザス語  
では dass (または、稀に語頭の d- が脱落した  
ass) が挿入される。

1) 従属の接続詞 **bevor, obwohl, indàm**  
(=nhd. indem), **nodàm** (=nhd. nachdem),  
**trotzdàm** (=nhd. trotzdem), **während [dàm]**  
(=nhd. während)<sup>11)</sup> の後で

例:

◆ **Wenn's eso isch, so zieg ich mich gli ab,  
bevor dass ich innegang. [Wil., S.44o./s.  
a.S.67o./S.67u./S.275m.]**

(=Wenn es so ist, so ziehe ich mich gleich,  
bevor ich hineingehe.)

“そういうことなら、中へ入る前に私は  
服を脱ぎます。“

◆ **Bevor ass àr üs'm Spital entlasse wird,  
tüet ihm dr Profässer noch sine Ràchnung  
vorlege. [Wil., S.48o.]**

(=Bevor er aus dem Krankenhaus/Spital  
entlassen wird, legt ihm der Professor noch  
seine Rechnung vor.)

“彼が病院から退院する前に、教授は彼  
にまず請求書を見せます。“

◆ **No meint d'r eint vu de Kosmonaute, in-  
dàm dass 'r d'r ander zärtlig umarmt:  
《Unsere Verlobung》.**

[Wil.,S.264m.|s.a.S.36o./S.49u./S.247o./  
S.268m./S.277u.<sup>2</sup>]

(=Nun meint der eine von den Kosmonauten, indem er den anderen zärtlich umarmt: «Unsere Verlobung».)

“その時、宇宙飛行士の一人がもう一人をやさしく抱きしめながら言います。「私たちの婚約です。」”

- ◆ **Natirlig sàit àr kei Wort, obwohl dass àr bis iwer beide Ohre in das Mäidle verliedt isch.** [Wil.,S.113o.]

(=Natürlich sagt er kein Wort, obwohl er bis über beide Ohren in dieses Mädchen verliebt ist.)

“彼はこの女の子にぞっこん惚れこのでいるにもかかわらず、もちろん一言も言いません。”

- ◆ **Am Ànd, nodàm dass alle g’lacht han, so sàit d’r Roger.** [Wil.,S.146o.]

(=Am Ende, nachdem alle gelacht haben, so sagt Roger.)

“最後に、皆が笑い終えると、ロジェは言います。”

- ◆ **Grad ei Platz isch in de Tribune nonit b’setzt g’sch, trotzdàm dass s Spihl schun-e Rung ag’fange hat.** [Wil.,S.159u.]

(=Gerade ein Platz war in den Tribünen noch nicht besetzt, trotzdem das Spiel schon eine Zeit lang anging.)

“劇はすでにしばらく前から始まっていたのにもかかわらず、観客席ではまだちょうど席が一つ空いていました。”

- ◆ **Wohl oder iwel müess das arme Annele d’r Karre bis uf Bantzene stosse, während dass d’r Roland am Länkrad sitze bliht.** [Wil.,S.129m.|s.a.S.154o.<sup>2</sup>]

(=Wohl oder übel muss das arme Ännchen die Karre bis auf Bantzenheim stoßen,

während Roland am Lenkrad sitzen bleibt.)

“ローランがハンドルを握り続けている間、可哀そうなアンネレはいやが応でもそのポンコツ車をバツェンハイムまで押して行かねばなりません。”

“während dàm dass …” の例が一例だけ見出される。

- ◆ **Wu’sè dr’no sin geh schlofe, so isch d’r Prieschter gli in’s Bett g’schlupft, während dàm dass d’r Pastor noch e Dusche nimmt.** [Wil.,S.196u.]

(=Als sie dann schlafen gingen, [so] schlüpfte der Priester gleich ins Bett, während der Pastor noch eine Dusche nimmt.)

“それから彼らが就寝する時に、[プロテスタントの] 牧師がまだシャワーを浴びている間に、[カトリックの] 司祭はさっさとすぐにベットへ入ってしまいました。”

2) さらに間接疑問文において、疑問詞の後にも dass が挿入される。

例：

- ◆ **Hasch ihm oi g’sàit, wurum dass dü vu mir g’stroft wore bisch?** [Wil.,S.260m.|s.a.S.27u./S.54u./S.160u./S.197o.]

(=Hast du ihm auch gesagt, wurum du von mir gestraft worden bist?)

“どうして君が私に罰せられたのか、彼(=お父さん)にも言ったかい？”

- ◆ **Kasch dü mir villicht erkläre, wieso dass ich e blund Hor uf dim Kittel g’funde han?** [Wil.,S.100o.]

(=Kannst du mir vielleicht erklären, wieso ich ein blondes Haar auf deinem Kittel gefunden habe.)

“どうしてあなたの仕事着に金髪が付いていたのか、教えてくれない？”

◆ **Mechte Si so frindlig si un luege, in wellem Arschloch dass ich mi Stylo han s[ch]tücke lo?** [Wil., S.56o.]

(=Möchten/Würden Sie so freundlich sein und sehen, in welchem Arschloch ich meinen Kugelschreiber habe stecken lassen?)

“どのお尻の穴に私のボールペンを突っ込まさせたのか、見てもらえないかね?”

## 7. ミュルーズ・アルザス語の動詞の特徴

動詞に関しアルザス語は簡素化と平準化が進み、標準ドイツ語と比較して学習が非常に容易である。上部ドイツ語方言に属するミュルーズ・アルザス語は総合時制としての直接法・過去形を完全に消失し、隣接するオーストリア＝バイエルン方言では残存が確認される標準語の *war* や *hatte* に当たる語すら存在しない。過去は現在完了形式によって示される。さらに他のアレマン諸方言と同様に接続法1式を保持する数少ないドイツ語方言であるとともに、**gäh** (=geben), **gsäh** (=sehen), **hã** (=haben) など縮約によって生じた一連の単音節動詞を持っていることも指摘しておきたい。以下のその詳細を実例を通して検証していく。

### 7-1. 不定詞の形態

アルザス語の動詞の不定詞は標準ドイツ語と比較すると簡素化が進んでいる。**si, se[h]** (=sein), **hã** (=haben), **tüen, düen** (=tun) など計8個のいわゆる“単音節動詞”を除くと、アルザス語の不定詞は本来の不定詞語尾 *-en* の *n* が脱落することにより一般に **mache, fahre, kumme, nämme, ziege** 等となる。

また、**müesse** (=müssen), **welle** (=wollen) 等の幾つかの話法の助動詞の例外を除いて、不定詞の語形がそのままの形で現在時制の(2人称の *ihr* をも含めた)統一複数形とし

て用いられているのみならず、複数2人称命令形としても用いられることもアルザス語の特徴である。(すなわちアルザス語の不定詞は、直接法・統一複数形および命令法・2人称複数と形態的に同一になり、この点ではチューリヒやベルン等のスイス・ドイツ語諸方言やドイツ南西部のアレマン方言と比較してもさらに簡便である。)

またコルマールおよびその周辺部、すなわちヴァイス (Weiss, S.92) によると北はセレスタ (Sélestat/Schlettstadt) の手前、南はミュルーズの北方までは **macha, fahra, nämme** 等と語末のアクセントのない曖昧母音が [a] に近い音となる。今回ミュルーズのアルザス・ドイツ語の言語資料として用いた2冊の書籍の内、“D’Läckür (笑選)”の著者ヴィレンフーバー (Willenhuber, Freddy) はミュルーズ西南の Brunstatt (アルザス語では Brunscht) の出身であることが後書きで指摘されているが (S.282f.), それを証しするように不定詞の語尾は一貫して **-e [ə]** を用いているのに対し、“J’apprends l’alsacien avec Tommy et Louise”の著者トロックスラー＝ラソー (Troxler-Lasseaux, Sylvie) は“ミュルーズ・ドイツ語は自分の母語 (le Millhüsersditsch, ma langue maternelle [S.4])”と述べてはいるものの、不定詞の語尾は一部の例外を除いて表記 **-a** を用いていることが多いことから、この街の北方で生まれ育ったと推測できる。

### 7-2. 動詞の直接法現在形

#### 7-2-1. 動詞の現在人称変化活用例-1 (一般の動詞)

単数における人称に応じた語尾に関しては、1人称で **-ø** (語尾なし)、2人称 (親称) で **-sch**, 3人称で **-t** となり、1人称で語尾 **-e** を持つスイス・ドイツ語方言よりもさらに簡



素化されている。なお2人称の語尾 -sch は、初期新高ドイツ語の人称語尾 -st がまず -sch<sup>2</sup> へと変化し、その後に語末の -t が脱落したものと考えられ、古高ドイツ語の人称語尾 -s が保持されているわけではない。(上記5-1-2の4)を参照)

標準ドイツ語:	ich mache	wir machen
	er macht	ihr macht
	du machst	sie machen
南部アルザス語:	ich mach	mir mache
	du machsch	ir mache
	àr mach <sup>t</sup>	si mache

なお、標準ドイツ語の強変化動詞(不規則動詞)の内で、直接法現在単数の2人称(親称)と3人称において語幹の母音を -a- > -ä- へとウムラウト(変母音)させるグループがあるが<sup>13)</sup>、アルザス語では他の上部ドイツ語諸方言と同様に、この場合に語幹母音の変化は見られず、標準ドイツ語と比較してより簡単に学習しやすい。

標準ドイツ語:	ich fahre	wir fahren
	du fährst	ihr fahrt
	er fährt	sie fahren
アルザス語:	ich fahr	mir fahre
	du fahrsch	ir fahre
	àr fährt	si fahre

- 1) **fahrsch** (=fäh<sup>r</sup>st), **fahrt** (=fäh<sup>r</sup>t) : [Wil., S.94u.|s.a.S.60m./S.258o.]

◆ **S'Dirringer Monique, vu Didene, wartet uf d'r Bus, wu in d'Stadt fährt.** [Wil., S.260 u.]

(=Dirringer Monique, von Didenheim, wartet auf den Bus, der in die Stadt fährt.)

“ディーデンハイムのディリンガー・モ

ニク嬢は街へ行くバスを待っています。”

- 2) **g'fallsch** (=gefäll<sup>st</sup>), **g'fallt** (=gefäll<sup>t</sup>) : [Wil., S.83m.|s.a.S.91o./S.93o.]

◆ **Dà Film g'fallt mir nit.** [Wil., S.113u.]

(=Der Film gefällt mir nicht.)

“その映画を私は気に入ってません。”

- 3) **laufsch** (=läuf<sup>st</sup>), **lauft** (=läuf<sup>t</sup>) :

◆ **Am andere Tag lauft'r dur d'r Hüsgang mit'me andere Patient.** [Wil., S.53u.]

(=Am anderen Tag läuft er durch den Hausgang mit einem anderen Patienten.)

“次の日、彼は別の患者と一緒に家の通路を歩いています。”

- 4) **waschsch** (=wäsch[e]st), **wascht** (=wäsch<sup>t</sup>) :

◆ **Will ich g'ärn wisse mecht, wi-me Herrehemder wäscht.** [Wil., S.135u.]

(=Weil ich gern wissen möchte, wie man Herrenhemde wäscht.)

“男性用のシャツをどうやって洗うのかを知りたくて。”

- 5) **grabsch** (=gräb<sup>st</sup>), **grabt** (=gräb<sup>t</sup>) :

◆ **Vu wit'm sàhn'se e Kàrle, wu allem Aschín no ein Loch grabt.** [Wil., S.77u.]

(=Von weiten sehen sie einen Kerl, der allem Anschein nach ein Loch gräbt.)

“遠くから彼らはどう見ても穴を掘っているような男を目にする。”

ただし、標準ドイツ語で強変化動詞の語幹母音が -t あるいは -d で終わるものは、直接法2人称および3人称でいわゆる“口調の -e-”を挿入せずに、語幹に直接に人称語尾を付すが(例: hältst, hält/lädst, lädst), アルザス語をはじめとした上部ドイツ語諸方言では動詞の語幹母音の人称による変化は一切ないのでみならず、3人称単数形において弱変化動詞と同様に“口調の -e-”を挿入したうえで人称語尾 -t を付している。しかし一方

では2人称親称単数においては直接人称語尾 -sch を語幹に付して, “口調の -e-” は挿入されない。

- 6) **haltet** (=hält) : [Wil., s.a.S.41o./S.163o. S.171o./S.181u.]

◆ **D’Moderne Wissenschaft haltet sehr vil uf d’Meinungsforschung.** [Wil., S.240u.]

(=Die moderne Wissenschaft *hält* sehr viel auf die Meinungsforschung.)

“現代の学問は世論調査をととても重要視している。”

- 7) **haltsch** (=hältst) :

◆ **Blasi, dü bisch so güet un haltsch di dumme Mül, gäll?** [Will., S.53m.]

(=Blasi, du bist so gut und *hältst* dein dummes Maul, gell?)

“ブラージ。お願いだから馬鹿なこと言わないでよね!”

- 8) **sich verhaltet** (=sich verhält) :

◆ **..., fir z’wisse, wie àr sich verhaltet, wenn ebber kummt, wu-n-àr nit kennt.** [Wil., S.182u.]

(=..., um zu wissen, wie er sich verhält, wenn jemand kommt, den er nicht kennt.)

“知らない人がきたら, 彼 (=オオム) がどんな行動を取るのか知るために…”

- 9) **ladet ... i** (=lädt ... ein) : [Wil., S.112o.]

◆ **... un ladet ihn dert î zum Mittagässe.** [Wil., S.206m.]

(=... und *lädt* ihn dort zum Mittagessen ein.)

“そして彼をそこで昼食に招待します。”

- 10) **ladet ... ab** (=lädt ... ab) :

◆ **Am Bahnhof ladet d’r Bernard sine Dame ab.** [Wil., S.182o.]

(=Am Bahnhof *lädt* Bernhard seine Dame ab.)

“駅でベルナールは自分の [車に乗せた] 女性を降ろします。”

また, 一方で現代の標準ドイツ語には単数の2人称(親称)および3人称において, 語幹母音 -e- を母音の長短に応じてそれぞれ -i- [i] あるいは -ie- [i:] とする一連の強変化動詞も存在するが, アルザス語は中高ドイツ語の伝統を受け継ぎ, 単数・1人称においても語幹母音として -i- [i] または -ie- [i:] を保持している。この点でも単数全般に同一の語幹母音を持つアルザス語の方が標準ドイツ語よりも外国人にとって学習しやすいといえるであろう。この点に関しては上部ドイツ語諸方言に属する他のアレマン諸方言並びに東に隣接するバイエルン=オーストリア方言も同様である。ただし, このグループに属する動詞は本来は強変化動詞の変母音系列の3, 4, 5類に属しており, 中高ドイツ語では(そして短母音の場合は今なお新高ドイツ標準語でも)語幹母音として -ë- [ɛ] を示していたが, 南部アルザス語では明るい -a- [a, a:] へと変化したことにより, この母音をもつ複数形に標準ドイツ語の表記に慣れた我々は当初に戸惑うことも多い。範例として **nämme** (=nehmen) の活用を挙げる。

標準ドイツ語: ich *nehme*      wir *nehmen*

du *nimmst*      ihr *nehmt*

er *nimmt*      sie *nehmen*

中高ドイツ語: ich *nime*      wir *nemen*

du *nimest*      ir *nemet*

er *nimet*      sie *nement*

アルザス語: **ich *nimm*      mir *nämme***

**du *nimmisch*      ir *nämme***

**àr *nimmît*      si *nämme***

- 1) **ich *nimm* (<nämme)** : [Wil., s.a.S.138m./

S.247u.]

◆ **Ich nimm jede Wuch e Bad, Herr Dokter!**

[Wil., S.63o.]

(=Ich nehme jede Woche ein Bad, Herr Dokter!)

“私は毎週お風呂に入っていますよ。先生!”

◆ **Ganz lislig han ich mine Nachttischschüblade ufgmacht, nimm mine Pischtole, ...** [Wil., S.177o.]

(=Ganz leise habe ich meine Nachttischschublade aufgemacht, nehme meine Pistole, …)

“そっと私は〔ベットの〕サイドテーブルの引き出しを開け、ピストルを取り出し…”

2) **ich lis (<läse) :**

◆ **Dü Manni, do lis ich grad e Artikel iwer d'Orientaler.** [Wil., S.97u.]

(=Du Manni, da lese ich gerade einen Artikel über die Orientaler.)

“ねえマニ。私ちょうど東洋人に関する記事を読んでいるの。”

3) **ich verbrich (<verbräche) :**

◆ **Ich verbrich mir d'r Kopf, was ich ihre schänke kennt.** [Wil., S.114o.]

(=Ich zerbreche mir den Kopf, was ich ihr schenken könnte.)

“彼女に何をプレゼントしたらいいのか私は頭を悩ませている。”

4) **ich vergiss (<vergässe) :** [Wil., S.251u.]

◆ **Ich trink nur, dass ich mich vergiss.** [Wil., S.185m.]

(=Ich trinke nur, dass ich mich vergesse.)

“私は我を忘れるほどひたすら飲むんだ。”

5) **ich vertritt (<verträtte) :**

◆ **Ich vertritt hitt do mi Brüeder, wu blind isch.** [Wil., S.160m.]

(=Ich vertrete heute dann meinen Bruder, der blind ist.)

“今日は目の見えない兄の代わりなんです。”

6) **ich wirf (<würfe) :**

◆ **Nur wenn ich e Sechser wirf, so b'stell ich e Bier.** [Wil., S.77m.]

(=Nur wenn ich einen Sechser werfe, so bestelle ich ein Bier.)

“(サイコロの目の) 六が出た時だけ、私はビールを一杯注文します。”

ただし、標準ドイツ語で強変化動詞の語幹母音が -t あるいは -d で終わるものは、直接法 2 人称および 3 人称でいわゆる “口調の -e-” を挿入せずに、語幹に直接に人称語尾を付すが (例: trittst, tritt), 南部アルザス語では動詞の単数形における語幹母音の人称による変化は一切ないのみならず, 3 人称単数形において弱変化動詞と同様に “口調の -e-” を挿入したうえで人称語尾 -t を付している。しかし一方では 2 人称親称単数においては直接人称語尾 -sch を語幹に付して, “口調の -e-” は挿入されない。

7) **trittet ... uf** (=nhd. tritt ... auf) : [Wil., S.112 o.]

◆ **A'me Wohltätigkeitskonzert trittet e friejere Theatersängere uf.** [Wil., S.137u.]

(=An einem Wohltätigkeitskonzert tritt eine frühere Theatersängerin auf.)

“あるチャリティーコンサートに以前の劇場女性歌手が出演します。”

7-2-2. 単音節動詞の現在人称変化 (活用)

アルザス語には他のアレマン諸方言と同様に一連の単音節動詞が存在する。ミュルーズ・アルザス語では単音節動詞として確認で

きた① **si** または **se[h]**, **see** [s:] (=sein), ② **hå** [hɔ:] (=haben), ③ **tüen** または **düen** (=tun), ④ **geh** (=gehen), ⑤ **steh** (=stehen), ⑥ **lo** (=lassen), ⑦ **gà[h]** [ga:] (=geben), ⑧ **[g]sàh** (=sehen) に, 未確認ではあるが, おそらく ⑨ **gschäh** (=geschehen) を加えた計 9 個が挙げられるが, その数は地域によって多少の入れ替えや一二の増減はあるものの上部ライン・アレマン語圏においては大きな違いはないようだ。ただしスイス領のバーゼル方言では, 隣接する高地アレマン方言の影響か, さらに **koo** (=kommen), **nää** (=nehmen), **aafoo** (=anfangen) がこの単音節動詞に加わる。

いずれも使用頻度の高い重要語彙であるが, 語源的に見てもとより単音節であった **si**, **se[h]** (=sein), **tüen**, **düen** (=tun) 以外は, 中高ドイツ語期になって二次的に短縮形が生まれたケースが多い。

以下にミュルーズ・アルザス語のそれぞれの単音節動詞の活用表と用例を挙げていく。

#### 1) **si** または **se[h]** [s:] (=sein)

標準ドイツ語: **ich bin**    **wir sind**

**du bist**    **ihr seid**

**er ist**    **sie sind**

古高ドイツ語: **ih bim**    **wir sîn**

**du bis**    **ir sît**

**er ist**    **sî sind**

中高ドイツ語: **ich bin**    **wir sîn, sint**

**du bist**    **ir sît**

**er ist**    **sî sint**

アルザス語:    **ich bin**    **mir sin**

**dü bisch**    **ihr sin**

**àr isch**    **si sin**

{分析的過去時制: **ich bin ... gsi/gse[h]** 等}

例:

◆ **... nur pressiert hat me halt nit derfe si.**

[Wil., S.121u.]

(=... nur pressiert hat man halt sein dürfen.)

„ただせっかちになることだけは許されていなくても仕方ありませんでした。“

◆ 《分析的過去時制の例》 **Francis, bisch dü immer ràcht brav gsi?** [Wil., S.24u.]

(=Frank, bist du immer recht brav gewesen?)

または **Warst du immer recht brav?**)

„フランシ, いつもちゃんと大人しくしていた?“

◆ **Um Gotteswille, was isch denn passiert? Sin Ihr iwerfalle wore?** [Wil., S.42u.]

(=..., was ist den passiert? Sind Sie überfallen worden?)

„ウワッ。一体どうしたんですか? 襲われでもしたのですか?“

#### 2) **hå** [hɔ:] (=haben)

標準ドイツ語: **ich habe**    **wir haben**

**du hast**    **ihr habt**

**er hat**    **sie haben**

古高ドイツ語: **ih habê**m    **wir habê**mês

**du habês**    **ir habêt**

**er habêt**    **sî habênt**

中高ドイツ語: **ich hân**    **wir hân**

**du hâst**    **ir hât**

**er hât**    **sî hânt**

アルザス語:    **ich han**    **mir han**

**dü hasch**    **ihr han**

**àr hat**    **si han**

{分析的過去時制: **ich han ... gha.** 等}

例:

◆ **Ich han e Frau*j* g'hirote, wu schu e erwachsene Tochter g'ha hat.** [Wil., S.71m]

(=Ich heiratete eine Frau, die schon eine erwachsene Tochter hatte.)

„私はすでに成人した娘のいる女性と結婚しました。“

◆ **Ich ka dir drei Zige bringe, wu gsàh han, dass dü das Vélo gs[ch]tohle hasch!** [Wil.,

S.61u.]

(=Ich kann dir drei Zeugen bringen, die gesehen haben, dass du das Fahrrad gestohlen hast.)

„私はお前が自転車を盗むのを目撃した3人の証人を連れてくることのできるのだぞ!“

◆ **Ihr han mir versichert, dass das Auto so lang hewe wird, as ich läb.** [Wil., S.97o.]

(=Ihr habt/Sie haben mir versichert, dass das Auto so lang halten wird, wie ich lebe.)

„あなたは私にこの車が私の生きている限りもつと保証しました。“

◆ 《分析的過去時制の例》

**Dà Kunde, wu grad üsse isch, dà hat kei Gàld uf sich g'ha.** [Wil., S.82u.]

(=Der Kunde, der gerade hinaus ist, [der] hatte kein Geld bei sich.)

„今ちょうど出て行ったお客さん、お金を持ち合わせていなかったんですよ。“

3) **tüen** または **düen** (=tun)

標準ドイツ語: ich tue	wir tun
du tust	ihr tut
er tut	sie tun

中高ドイツ語: ich tuon	wir tuon
du tuost	ir tuot
er tuot	si tuont

アルザス語: <b>ich tüe</b> [n]	<b>mir dien</b>
<b>dü tüesch</b>	<b>ihr dien</b>
<b>àr tüet</b>	<b>si dien</b>

{メモ: 過去分詞が消失したため、分析的過去時制は存在しない}

例:

◆ **Wenn nieme in dâne fremde Schüe stäckt, wu unterem Bett sin, so tüen ich mir nur rasiere.** [Wil., S.96m.|s.a.S.48o./S.69u./S.103o./S.180u./S.198o.]

(=Wenn niemand in den fremden Schuhen steckt, die unter dem Bett sind, so rasiere ich mich nur.)

„ベッドの下にある見かけない靴の中に誰も隠れていなければ、自分の髭を剃るだけだ。“

◆ 《主文中の異形態 **düen**》

**Àr list sine Zittung, sie düet d'Wäsch klette.** [Wil., S.278m.]

(=Er liest seine Zeitung, sie glättet/bügelt [gerade] die Wäsche.)

„彼 (= 夫) は新聞を読み、彼女 (= 妻) は洗濯物にアイロンをかけている。“

◆ 《副文中の **tüen, düen**》

**Wu's Mélanie, mine Frau, gstorwe isch, han ich ihm versproche, dass ich nimme hirete düen.** [Wil., S.165o.|s.a.S.18o./S.24u.]

(=Als Melanie, meine Frau, gestorben ist, habe ich *ih*r versprochen, dass ich nie mehr heirate.)

„妻のメラニーが亡くなった時、私はもう二度と結婚しないと彼女に約束したんだ。“

4) **geh** [ge:] (=gehen)

標準ドイツ語: ich gehe	wir gehen
du gehst	ihr geht
er geht	sie gehen

古高ドイツ語: ih gën	wir gëmés
du gëst	ir gêt
er gêt	si gënt

中高ドイツ語: ich gën	wir gën
du gëst	ir gêt
er gêt	si gënt

アルザス語: <b>ich gang</b>	<b>mir gehn</b>
<b>dü gehsch</b>	<b>ihr gehn</b>
<b>àr geht</b>	<b>si gehn</b>



{分析的過去時制: **ich bin ... gange** 等}

例:

- ◆ **Tommy, hit isch Mantig, müesch in d' Schüel geh!** [Wil., S.52m.]

(=Tommy, heute ist Montag, du must in die Schule gehen!)

„トミー, 今日は月曜日。学校に行かなきゃね!“

- ◆ **Papa, ich gang noch gschnäll bis zum Briefkaschte, fir e Karte i z'wàrfe.** [Wil., S.116o.]

(=... ich gehe noch schnell bis zum Briefkasten, um eine Karte einzuwerfen.)

„パパ, 私, 葉書を投函しにとりあえず急いでポストまで行ってくるね。“

- ◆ **Awer Madame Schmitt,... Si hat mir gsàit, dass Ihre Mann drei Monet zu sim Unkel gange isch.** [Wil., S.65m./s.a.S.44u./S.184u./S.257u.]

(=Aber Frau Schmitt, ... Sie haben mir gesagt, dass Ihr Mann drei Monate zu seinem Onkel ging.)

„でもシュミットさん…旦那さんが, 3ヶ月の間, 伯父さんのところへ行っていたとあなたは私に言いましたよね。“

##### 5) **gà** または **gàh** [ga:] (=geben)

標準ドイツ語: **ich gebe wir geben**  
                   **du gibst ihr gebt**  
                   **er gibt sie geben**

古高ドイツ語: **ih gibu wir gebumê**  
                   **du gibist ir gebet**  
                   **er gibit sie gebant**

中高ドイツ語: **ich gibe wir geben**  
                   **du gïst ir gebet**  
                   **er gît sie gebent**

アルザス語: **ich gib mir gan**  
                   **du gisch ihr gan**

**ar gitt si gan**

{分析的過去時制: **ich han ... gâh** 等}

例:

- ◆ **Ich gib dir e güeter Rot.** [Wil., S.178u./s.a.S.27m./S.49m./S.68m./S.85m./S.155u./S.200o./S.211o./S.218m. 等]

(=Ich gebe dir einen guten Rat.)

„君にひとつ良い助言をしよう。“

- ◆ **Pape, wenn dü im Baschele 10 Franke gisch, so macht'r in're Hühn no.** [Wil., S.69u./s.a.S.178o./S.220m.]

(=Papa, wenn du Baschele 10 Franken gibst, so macht er einer Henne nach.)

“パパ。バシエレ (ゼバステアンの愛称) に10フランあげたら, あの子めンドりの真似するよ。“

- ◆ **... un [àr] git ein d'rvu im Riss François.** [Wil., S.154o./s.a.S.18o./S.21u./S.23o./S.30u./S.43u./S.54m./S.67m./S.82m./S.133u./S.134m./S.160m./S.184m./S.219m./S.236u. 等]

(=... und [er] gibt Riss François<sup>3</sup> einen [Apfel] davon.)

„そして [彼は] そのうちの一つ [のリンゴ] をリス・フランソワにあげます。“

##### 7-3. 二人称敬称の **Ihr** と **Sie**

Weiss (S.33) によるとアルザス人同士では二人称敬称の人称代名詞としては一般に **Ihr** を用い, 聞き手がドイツ語を話す外国人だという認識があったときにのみ **Sie** (ただし発音は [se:] を用いるとの指摘がなされているが, Willenbacher のジョーク集を調べた限りでは, アルザス人同士であっても従来の古い敬称 **Ihr** と並んで標準ドイツ語の影響で新たに登場した **Sie** も用いられている。しかしその人称語尾は, 標準語の語尾 **-en** に由来するアルザス語の語尾 **-e** と並んで, 同じ人称代

名詞 *si* (=nhd. *sie*) を共有する直接法・3人称・単数・現在の語尾 *-t* を示すこともあり、いまだに安定していないようだ」。

◆ **Wie alt *isch* Sie, Madam? — Zwei-e-drissig, Herr Dokter!** [Wil., S.79m. | s.a. S.41m.]  
(=Wie alt *sind* Sie, Madame? — Zweiunddreißig, Herr Doktor!)  
„奥様。お幾つになりますか? — 32歳です。先生!“

なお極端な場合、同一人物の発言内容であっても、最初の文では語尾 *-t* を用いているのに対し、後続の文では語尾 *-e* を用いているケースもあって興味深い。

◆ **Macht *Sie* sich wägedàm kei Sorge, dà finde *Sie* uf Ihre Ràchnung.** [Wil., S.164o.]  
(=Machen Sie sich deswegen keine Sorge, den finden Sie auf Ihrer Rechnung.)  
“それゆえ心配しなくてもいいのですよ。それはあなたの請求書上で見つかりますから。”

#### 7-4. 話法の助動詞の直接法・3人称・単数・現在形における人称語尾 *-t* の添加

標準語ドイツ語では、*wollen* を除く5つの話法の助動詞および *wissen* は、印欧語のいわゆる“過去現在動詞 (Präterito-Präsens)”に起源を有し、それゆえ活用 (動詞の人称語尾変化) は直接法・過去と同一ながら意味的には現在時称として用いられている。南部アルザス語の上記の動詞に見られる顕著な事象は、そのうちの幾つかの助動詞の直接法の3人称・単数・現在形に他の一般的な動詞の現在形への類推から人称語尾 *-t* の添加が見られることである。具体的にはミュルーズのアルザス語では **kenne** (=können), **müesse** (=müssen), **wisse** (=wissen), **derfe** (=dürfen), の4つに限られるようだが、そ

れぞれ助動詞ごとに *-t* 語尾の定着度が異なり、**kenne** に関しては例外なく **kat** が用いられているのに対し、それ以外の助動詞では語尾 *-t* を持つ語形はむしろ稀である。なお、コルマルのアルザス語では [ma:jt] という音声形態も指摘されており (Philipp/Bothorel-Witz, S.327), またアルザスにおける **meegt** [me:kt], **mägt** という形態の存在の指摘もある (Zeidler/Crévena-Werner, S.84)。同じ低地アレマン方言に属するライン右岸のドイツ領フライブルク周辺のブライスガウ・アレマン方言、およびスイス北端部のバーゼル・ドイツ語はもちろんのこと、高地および最高地アレマン方言に属するスイス・ドイツ語諸方言にも見られない注目すべき特徴といえよう。その原因として考えられるのは、ナチスの占領下にあった4年間を除き、第一次世界大戦後から長期に亘って (アモン流の表現では) 標準ドイツ語の“屋根の下になかった (dachlos)”アルザス・ドイツ語方言では、(ちょうどオランダ本国との関係を断ち切れアフリカーンス語が独自の変化を遂げたと同様に、) 他の一般的な動詞からの類推により3人称単数の人称語尾 *-t* が、日常の言語活動の中でとりわけ頻度の高いとされている **können**, **müssen** を中心に定着した可能性があるが、真偽のほどは今後のとりわけ通時的調査に委ねられよう。以下にミュルーズ・アルザス語の文例を中心に挙げるが、一部コルマル・アルザス語も含めている。

##### 1) **kenne** :

◆ **Die (=mine Frau) *kat* Eich villicht driwer e Uskunft gäh.** [Wil., S.241o.]  
(=Die (=meine Frau) kann Ihnen vielleicht darüber eine Auskunft geben!)  
„私の妻なら、ことによったらそれについて情報をあなたに提供することができかもしれません!“

◆ **Ich bin d'r Güscht, ... da, wu ka zaiwra!**  
[Tro, S.72u.]

(=Ich bin Gustav/August, ... derjenige, der zaubern kann!)

(=Je suis le clown Guchti, .... celui, qui sait faire de la magie!)

“私はマジックができる… (ピエロの) ギュシュティです。”

◆ **Awer bewîse ka mir's keiner.** [Wil., S.204u.]

(=Aber beweisen kann es mir keiner.)

„しかし誰も私にそのことを証明することはできないのです。”

◆ **Dà arme Tropf ka nit dr'fir.** [Wil., S.36u.]

(=Der arme Tropf kann nicht dafür.)

„この哀れなおバカさんには責任がない。”

◆ **Keiner ka mir hâlfe.** [Wil., S.184]

(=Keiner kann mir helfen.)

„誰も私を助けることができない。”

◆ **So ebbis ka jeder Hund mache.** [Wil., S.163u.]

(=Sowas/ So etwas kann jeder Hund machen.)

„そんな事ならどんな犬だってできるよ。”

◆ **Awer witt vu do ka's nit si.** [Wil., S.17o.]

(=Aber weit von da kann es (=Afrika) nicht sein.)

„しかしそこから遠いところにアフリカがあるわけではない。”

◆ **I'me Restaurant ... ka me am Igang lase**  
... [Wil., S.210m.]

(= In einem Restaurant ... kann man am Eingang lesen ...)

„あるレストランの入口のところに ... と読むことができます。”

2) “müesse :

標準ドイツ語の3人称単数形 muss に該当

するアルザス語の語形には3種あり、最も一般的な müess, 他の動詞からの類推による語尾 -t を伴う müesst, そしてウムラウトも語尾も伴わない muess であるが、最期の語形は müess の誤植と捉える事もできる。今回の Wil を対象とした調査では、人称語尾 -t を持つ müesst (6例) は最も多い müess (7例) に次いで多く、ちなみに誤植の可能性の高い muess は3例のみである。

◆ **Ebbis müesst Se doch noch erfahre, Madam.** [Wil., S.249u./s.a.S.54m./S.63o./S.64o./S.252m./S.269o.]

(=Etwas müssen [逐語的 muss] Sie doch noch erfahren...)

„奥様。あなたにまだ知ってほしいことがあるのですけど。”

◆ **Wagges! Dàs müesst a gfitzter Hund see!**  
[Tro., S.13u.]

(=... Das muss ein schlauer/gewitzter Hund sein!)

„ヴァッグス！ この子はお利口な犬に違いありませんね！”

◆ **Müess's nit in d'r Spital?** [Tro, S.40o.]

(=Muss sie nicht ins Krankenhaus/ins Spital?)

„あの子は病院へ行く必要はないのですか？”

3) wisse :

語尾 -t を持たない語形が Wil. では一般的であり, weisst という語形は1例しか見出されていないが, それでも Tro. では kenne, müesse に次いで頻度が高く, 数例確認できる。

◆ **Wu'se (=e Italienere) in d'Metzge kummt, fir e Kilo Kalbfleisch z'hohle, weisst'se nit, wie'me Kalbfleisch uf Ditsch sàit.** [Wil., S.232o.]

(=Wenn sie in die Metzgerei/Fleischerei

kommt, um ein Kilo Kalbfleisch zu kaufen, weiss sie nicht, wie man Kalbfleisch auf Deutsch sagt.)

„あるイタリア人女性が1キロの子牛の肉を買うために肉屋へ行った時、子牛の肉をドイツ語でなんというのかわかりません。“

◆ **Är weissst, dass'r nochhär sina Gschänkla bikummt.** [Tro, S.47m.]

(=Er weiß, dass er nachher seine kleinen Geschenke bekommt.)

„彼は後でささやかなプレゼントをもらえると知っています。“

◆ **Schlieslig weissst är's besser as dü!** [Tro, S.53m.]

(=Schließlich weiß er es besser als du!)

“結局、彼の方があなたよりそのことを良く知っている！”

◆ **Manichmol weissst m'r sælw'r nimm, wi m'r heisst!** [Weiss, S.48m.]

(=Manchmal weiß man selber nicht mehr, wie man heißt.) [コルマール]

„時々なんという名前なのか自分ではもうわからない。“

4) **derfe** :

今回の調査では以下の3例しか見出されなかった。

◆ **Mi Ross derft Sie nit säh!** [Wil., S.217u.]

(=Mein Pferd/Ross darf Sie nicht sehen!)

„私の馬はあなたの姿を見てはならないのです!“

◆ **Das derft me riwig behaupte.**

[Wil., S.284u.]

(=Das darf man ruhig behaupten.)

„安心してそう主張してもかまわない。“

◆ **Das derft ma doch nit.** [Tro, S.60u.]

(=Das darf man doch nicht.)

„そんなことをしてはいけません!“

## 7-5. ミュルーズ・アルザス語の接続法

多くのドイツ語方言では、一部の形骸化した慣用表現を除いて一般的に接続法1式を事実上消失してしまったが、多くのアレマン諸方言は間接説話の用法としての接続法1式が残存する点で特筆に値する。

### 7-5-1. 接続法1式

Philipp/Bothorel-Witz (S.326) によると接続法1式は南部アルザス語で年配の世代で今なお用いられているに過ぎず、北部アルザス語にはすでに存在していないようだ。ただし、ライン川対岸のドイツ領ブライスガウ地方やスイス北部の都市バーゼルの低地アレマン方言にも同様に接続法1式が残存している。

#### I. 形態

Tro. は巻末の活用表でミュルーズ・アルザス語の接続法1式として **seig** (=sei) と **heig** (=habe) の人称変化しか挙げてない。アレマン方言の接続法1式の形態的特徴は、すでに中高ドイツ語時代に動詞語幹に接尾辞 **-ege-** (=eje-) を伴って現れるが (Weinhold-Ehrismann-Moser 1972, § 156, § 171), この接尾辞はもともと弱変化動詞2類および3類に添加されていたもので, **han** (=haben) は元来は弱変化動詞3類に属することから,すでに中高ドイツ語期のアレマン方言に **heige** (<heb-ege) が存し, さらにこれは語末音省略 (Apokope) を経て現在の **heig** に至っていると考えられよう。これに対して **seig** (=sei) は起源が異なると考えられ, 本来の語形 **sî** に類推により強変化動詞の接 (中) 辞 **-e-** が二次的に添加され, さらに母音連続 (Hiatus) を避けるために渡り音 **-g-** (<j) を伴う **sîge** という形態が中高ドイツ語のアレマン方

言の特徴として指摘されている (Weinhold-Ehrismann-Moser 1972, § 168)。現代語では本来なら音法則的に \*sig, \*siig となるはずだが、**heig** からの類推により **seig** となったと考えられる。

## II. 用法と例

標準ドイツ語の接続法 1 式の用法とは異なり、ミュルーズ・アルザス語のそれは一部の固定化した慣用句的表現を除いて願望・要求・命令を表すことはなく、もっぱら発言内容に責任を持たない、あるいは責任を持ちたくないことを明示する間接話法的用法でのみ使用されているようだ。

例：

◆ **Jede Nacht trauim ich, ich seig e Ochs un müess e Hüffe Hei frässe.** [Wil., S.70 o.]

(=Jede Nacht träume ich, ich sei ein Ochse und müsse einen Haufen Heu fressen.)

„毎夜、私は自分が牛になり、山ほどの干草を食べねばならない夢を見ている。”

◆ **Mir hat mir g'sàit, d'Hochzittsnacht seig d'scheenschte Nacht.** [Wil., S.111u.]

(=Man sagte mir, die Hochzeitsnacht sei die schönste Nacht.)

„結婚式の夜は最も素晴らしい夜だと人は私に言っていた。”

◆ **Was han'i erfahre, Madam Essig, Eyer Mann seig im Bach vertronke?** [Wil., S.94m.]

(=Was habe ich erfahren, Frau Essig, Ihr [逐語的 Euer] Mann sei im Bach ertrunken?)

„エッシッヒさん。私、何を聞いたと思います。あなたの旦那さん、小川で溺れて死んでしまったのですって?”

### 7-5-2. 接続法 2 式の **tàt, dàt** 等

ミュルーズ・アルザス語に関して Willen-

bucherを調査した限りでは、中高ドイツ語より引き継がれた本来の接続法 2 式の語形は、強変化動詞では **wàr** (=nhd. wäre), **hätt** (=nhd. hätte), **gàb** (=nhd. gäbe), **kàm** (=nhd. käme), その他では **sod** (=nhd. sollte), **kennt** (=nhd. könnte), **wisst** (=nhd. wüsste) を除いて見出されなかった。なお、最後の 2 語に関しては、コルマール・アルザス方言に 2 次的に見られる接尾辞 **-tig[t]** (例: **gattigt**, **gabtigt**, **giengtigt**, **liesstigt**, **derftigt**) が付加された語形 **kenntigt[t]**, **wisstigt** もそれぞれ一例ずつではあるが見出される。

上記以外の動詞に関しては „tügen, düen の接続法 2 式の語形 **tat, dat** (=nhd. täte) と不定詞“を用いて表現される。用法としては条件法だけではなく控え目な表現や間接話法の例も確認される。

### 7-5-2-1. 条件法 (Konditional) における **tàt, dàt**

条件部および結論部において標準語の würde と同じように助動詞的に用いている。

1) 条件部と結論部が揃っているケース：

◆ **S gàb vu witem nit sovil Scheidunge, wenn d'Männer z'erschit ihre zweite Frau dàte hirete.** [Wil., S.74o.]

(=Es gäbe bei weitem nicht so viel Scheidungen, wenn die Männer zuerst ihre zweite Frau heiraten würden.)

„男たちが最初から二番目の妻と結婚していたら、そんなに多くの離婚は断然なかったことでしょうに。”

◆ **Wie wàr's, wenn de morn wider zu mir kàmsch?** [Wil., S.124u.[s.a.S.234m]

(=Wie wäre es, wenn du morgen wieder zu mir kämest?)

„明日また君が僕の所へ来るというのはどう?”



2) 条件部の独立用法の例:

- ◆ **Mei, wenn ich das oi mache tât!** [Wil., S.139u.]  
 (=..., wenn ich das auch machen würde!)  
 „でも、私も[仮に] そうしたとしたら [どうするの] ! “
- ◆ **..., wenn ich bi ihm iwarnachte dât.**  
 [Wil., S.272o.]  
 (=..., wenn ich bei ihm übernachten würde.)  
 „私が彼と一晩過ごしたとしたら... “
- ◆ **Wenn dü tâtsch wisse, was mir d’letschte Nacht passiert isch.** [Wil., S.242u.]  
 (= [Wie wär’s,] wenn du wüsstest, was mir letzte Nacht passiert ist.)  
 „昨夜私の身に何が起きたか、あなたが知ったとしたら [どうなるかしらね]。 “

3) 結論部の独立用法の例:

- ◆ **An Eyrem Platz tât ich d’rno üsstige.**  
 [Wil., S.99o.]  
 (=An Ihrer Stelle würde ich dann aussteigen.)  
 „私があなたの立場だったら、そういうことなら [電車を] 降りるでしょうね。 “
- ◆ **So ebbis dât mi Mann nit mache!** [Wil., S.261u.]  
 (=So [et]was würde mein Mann nicht machen!)  
 „そんなことは、うちの旦那だったらしないでしょうね! “

7-5-2-2. 控え目な依頼・言及

- ◆ **Sag, Alex, gâbsch dü mir nit s’Rezàpt vum <Cocktail alsacien>?** [Wil., S.207m.]  
 (=逐語訳: ..., gäbest du mir nicht das Rezept vom ...?)  
 „ねえ、アレックス。僕に “アルザス・カクテル “ の作り方を教えてくれないかな? “

- ◆ **Dü sodsch d’r Fisch nit mit’m Mässer schnide, so ebbis macht sich nit.**  
 [Wil., S.213o.]

(=Du solltest den Fisch nicht mit dem Messer schneiden, so [et]was macht sich nicht.)

„君にはナイフで魚を切って欲しくないな。そんなこと似合わないよ。 “

- ◆ **Do gâb’s e Üswâg, reede doch mit mim Vater!** [Wil., S.212m.]

(=Da gäbe es eine Ausweg, rede doch mit meinem Vater!)

„ [ひょっとしたら] 打開策があるかも知れませんか。私の父と話してみてください! “

- ◆ **Ich wisstigt e Leesung.** [Wil., S.99o.]

(=Ich wüsste eine Lösung.)

„ [ことによれば] 解決策が分かるかも知れませんか。 “

- ◆ **S’kenntig ebber dure kumme.** [Wil., S.280m.]

(=Es könnte jemand vobeikommen.)

„ [ひょっとしたら] 誰かが通りかかるかもしれないので。 “

7-5-2-3. 間接話法におけるtât, dât

- ◆ **Mi Pape sàit nur immer, Ihr tâte wie ei Loch süffe.** [Wil., S.28m.]

(=Mein Papi sagt nur immer, Sie saufen wie ein Loch.)

„パパはいつもあなたが底なしだ (=穴のようにがぶ飲みする) とだけ言っているわ。 “

7-6. 不変化詞 ge[h] を用いた表現 (アレマン諸方言に共通)

**geh, kumme, schicke** は後に不定詞を伴う場合にその前に不変化詞 ge[h] を伴う。これは語源的には動詞 **geh** (=nhd. gehen) の不定

詞に由来するといわれている。

例：

◆ **Ich gang schnäll geh lüege!** [Wil., S.139u.]

(=Ich gehe schnell [um zu] schauen!)

„急いで見に行きます!“

|チュエリヒ・ドイツ語：Gemmer goge  
luege! „見に行こう!“ を参照|

◆ **Ich gang ge schaffa. Au revoir!** [Tro.,

S.31|s.a.S.30]

(=Ich gehe arbeiten. [Auf] Wiedersehen!)

„私、仕事に行くのです。さようなら!“

◆ **Mama, wenn kummt d'r Tommy ge spie-  
la?** [Tro., S.22|s.a.S.30]

(=..., wann kommt Tommy, um zu spielen?)

„ママ、いつトミーは遊びに来るの?“

◆ **D'Madam Weber ... schickt dr Robele geh  
s'Brot ho[h]le.** [Wil., S.17u.]

(=...schickt Robele, um das Brot zu kaufen.)

„ヴェーバー夫人は...ローベレにパンを  
買いに行かせます。“

◆ **Da geht entweder geh fische oder zu si-  
nere Maîtresse.** [Wil., S.75m.]

(=Der geht entweder fischen oder zu seiner  
Geliebten.)

„彼は魚釣りに行くか、自分の愛人のと  
ころへ行くかだ。“

◆ **..., wenn dü morn schu bi mir kämsch geh  
schlofe.** [Wil., S.234m.]

(=..., wenn du morgen schon kämest, um bei  
mir zu schlafen.)

„君が明日も僕のところに寝に来てくれ  
たら... “

ただし、完了形式の過去形（これこそ“複  
合過去“と呼んでもいいのでは？）にした場  
合、geh の過去分詞 gange (=gegangen) は省  
略される点に注意が必要である。

◆ **D'r Lehrer isch mit sine Schieler d'r Mil-  
häuser Zoo geh b'sichtige.** [Wil., S.25u.]

(=... ist mit seinen Schülern gegangen, um  
den Mühlhausener Zoo zu besichtigen.)

„先生は生徒達を連れてミュルーズ動物  
園を見学しに行きました。“

◆ **Am Owe sin'se mitnand Montmartre geh  
b'süeche.** [Wil., S.220o.]

(=Am Abend sind sie miteinander gegangen,  
um Montmartre zu besuchen.)

„夕方になると彼らは一緒にモンマルト  
ルを訪れるために出かけました。“

## 7-7. „tüen/düen ... +不定詞“ 構文

まず、**tüen/düen** という語形の二重性だが、  
東に隣接するバイエルン＝オーストリア方言  
を含め一般に上部ドイツ語諸方言では、無声  
子音 p,t,k は呼気の弱い軟音 (Lenis) である  
といわれ、それを表記するためには二通りの  
可能性があり、標準ドイツ語を意識した語源  
的表記と、音声的特徴を強調する表記が昔か  
ら併存していた。しかしながら Willenbacher  
にしても Troxler-Lasseaux にしても、一般に  
語源的表記を用いているのに、標準ドイツ語  
の “tun” に該当する動詞のみ無声軟音を強  
調して d- を用いるのはバランス感覚的にお  
かしい。著者あるいは編集者もそれをある程  
度は認識しているのか **tüen** と比較して **düen**  
の頻度は低い。

さて、Schwarz (S.24f.) によると20世紀初  
頭に刊行されたアルザス語辞典には、この “  
tun を用いた迂言的用法” に関しての説明は  
ないそうである。彼自身はバーデン方言辞典  
に準拠していると思われるが、**„tüen/düen ...  
+不定詞“** の4つの機能を挙げている。(但  
し用例に関しては1)と4)のみしか挙げら  
れていない。)

1) 行為の強調 (Hervorhebung der Hand-

lung)

- 2) 一般的ではない語形の忌避 (Vermeidung ungebräuchlicher Formen)
- 3) 語順変更を可能とするため (Ermöglichung der Wortstellungsveränderung)
- 4) 接続法の形成 (Bildung des Konjunktivs) (7-5-2.接続法2式の *tät, dät* を参照せよ!)

ただ、これではいまひとつ明快ではない。Suter は同じ低地アレマン方言に属するバーゼル方言文法書 (Baseldeutsch-Wb., S.151f.) の中でさらに詳細な分類をおこなっている。従ってSuter の見解を加えて勘案することにより, „tüen/düen ... +不定詞“ の用法をより明晰にすることができよう。以下の中黒 (・) の後の文例は全て Suter の挙げるバーゼル・ドイツ語であるが, その下に, Willenbucher において見出されたミュルーズ・アルザス語の *tüen/düen* を用いた11例の内, 該当すると考えられるものを示す。

まず, ”1) 行為の強調” に関しては, 以下の2種に細分できる:

- a) 対比を際立たせる際, 動詞概念を強調するため

《バーゼル・ドイツ語の例》

- ・ Ghèert han i s schò, aber glaube *duen* i s nit.  
(=Gehört habe ich es schon, aber glauben tue ich nicht.)  
“私はそれを聞くには聞いたが, 信じてはいない。”
- ・ Er schafft nit, er *duet* fuulänze.  
(=Er arbeitet nicht, er faulenz.)  
“彼は仕事もせずに, ぶらぶらしている。”

ミュルーズ・アルザス語の例:

- ◆ Àr list sine Zittung, sie *düet* d'Wäsch klette.

[Wil.,S.278m.]

(=Er liest seine Zeitung, sie bügelt/glättet die Wäsche.)

“彼は新聞を読んでいるが, (一方) 彼女は洗濯物にアイロンをかけている。”

- ◆ Kasch riewig lüt reede, Casimir, ... heere *tüet'se oi nit!* [Wil.,S.103o.]

(=[Du] kannst ruhig laut reden, Casimir, ... hören tut sie auch nicht!)

“カシミール, 安心して大きな声で話してもいいんだよ。どうせ彼女には聞こえないのだから!”

- ◆ Wenn nieme in dâne fremde Schüe stäckt, wu unterem Bett sin, so *tüe-n* ich mir nur rasiere. [Wil.,S.96m.]

(=Wenn niemand in denen fremden Schuhen steckt, die unter dem Bett sind, so rasiere ich mich nur.)

“ベットの下面にあるその見かけない靴の中に誰も隠れていなければ, 自分の髭を剃るだけだよ。”

- ◆ Das isch nàtt vu dir, Biewle, dass dü mir das mälde *düesch*. [Wil.,S.18o.]

(=Das ist nett von dir, Bübchen, dass du mir das meldest.)

“僕, [他の子達とは違って] そのことを私に報告してくれてありがとうね。”

- b) 人の行為を尋ねる質問に対する答えの中で, 動詞概念を強調するため

《バーゼル・ドイツ語の例》

- ・ A: Was machsch? — B: Nyt, i *due* dängge.  
(=Was machst du? — Nichts, ich denke.)  
„何してるの? — 何も。考えてるだけさ。”
- ・ A: Was macht d Frau Schnyyder? — B: Si *duet* glètte.  
(=Was macht Frau Schneider? — Sie glättet/bügelt.)

„シュニーデルさんは何をしていますの  
すか？ — アイロンをかけてますよ。“

ただし必ずしも疑問文が先行していない場  
合であっても、文脈から判断してそれに該当  
する状況が想定されるならばこのケースに該  
当すると考えると、ミュルーズ・アルザス語  
にはこの用例が比較的多い。これらの用例  
では該当する文例の前に“Was macht...?”を  
補ってみると理解しやすいだろう。

ミュルーズ・アルザス語の例：

◆ Dr Herr Pfarrer tüet’ne iwerall ifiehere.

[Wil.,S.180u.]

(=Herr Pfarrer führt ihn überall ein.)

“[何をするのかといえば] 牧師は彼 (=副  
牧師) をどこにでも紹介します。“

◆ Bevor ass àr üs’m Spital entlasse wird,  
tüet ihm dr Profässer noch sine Ràchnung  
vorleege. [Wil.,S.48o.]

(=Bevor er aus dem Spital/Krankenhaus  
entlassen wird, legt ihm der Professor noch  
seine Rechnung vor.)

„[何をするのかといえば] 彼が病院から  
退院する前に、教授は彼に [なんと] 請求  
書を差し出した [のです]。“

◆ Àr geht in s’Badzimmer un tüet si Rasier-  
mässer wetze. [Wil.,S.96m.]

(=Er geht ins Badezimmer und wetzt sein  
Rasiermesser.)

“[何をしているのかといえば] 彼は浴室に  
入って、剃刀を研いでいます。“

◆ D’Familie Koch tüet ihre Ferie in’re kleine  
Bàrgferm bi Lintel verbringe. [Wil., S.198o.]

(=Die Familie Koch *verbringt* ihre *Ferien* in  
einer kleinen Bergfarm bei Lintel.)

“[何をしているのかといえば] コッホ一家は  
リントル近郊の小さな山の農場で休暇を

過ごします。“

続いて，“2）一般的ではない語形の忌避”  
に関しても、以下の2種に細分できる：

c) 不慣れな語形を回避するため

《バーゼル・ドイツ語の例》

・ Wènn duesch ässe? (Wènn issisch? の代わ  
りに)

(=Wann isst du?) „何時食事を取るの?“

・ Er duet gärn fächte. (Er ficht の代わりに)  
(Er ficht gern.) „彼はフェンシングが好  
きです。“

なお、明らかにこれに該当すると思われる  
ミュルーズ・アルザス語の文例は今回は見出  
されなかった

d) アクセントの置かれない音節の連続を回  
避するため（とりわけ -ere, -ele で終わ  
る動詞において）

《バーゼル・ドイツ語の例》

・ Dien er èppis schryynere? {Schryynere-n er  
èppis? の代わりに}

(=Schreinert ihr etwas?) „君たちは日曜大  
工で何かを作るのかい?“

・ Dien er wider bäschele? {Bäschele-n er  
wider? の代わりに}

(=Bastelt ihr wieder?) „君たちはまた [趣  
味で] 工作をしているのですか?“

ミュルーズ・アルザス語の例：

◆ Owe dri tüet’se noch stott’re. [Wil.,S.103o.]

(=Obendrein stottert sie noch.)

“おまけにさらに彼女はどもっている。“

e) さらに，“3）語順変更を可能とするた  
め”に関しては、Suter では“名詞と結び付  
いた固定的表現の場合 (Bei festen Fügungen  
mit Substantiv)”に該当するであろう。

《バーゼル・ドイツ語の例》

- ・ S *duet* Katze haagle. {S haaglet Katze の代わりに}  
(=Es hagelt Katzen.) „電が激しく降っている。“
- ・ Mer *dien* z Midaag ässe. {Mer ässe z Midaag の代わりに}  
(=Wir essen zu Mittag.) „私たちは昼食を取る。“
- ・ Si *dien* Driebsaal bloose. {Si bloose Driebsaal の代わりに}  
(=Sie blasen Trübsal.) „彼らは塞ぎ込んでいる。“

明らかにこれに該当すると思われるミュルーズ・アルザス語の文例は今回は見出されなかったが、上記b)の最後の3例は、場合によってはそれぞれ “**Ràchnung vorleege**”, “**Rasiermässer wetze**”, “**Ferie ...verbringe**” という “名詞と結び付いた固定的表現” の不定詞句の語順を維持するためと取ることも可能であろう。

先に触れた “4) 接続法の形成 (“7-5-2. 接続法2式の *tàt, dàt*” を参照) “ 以外に, Suter はさらに次の2点の用法を挙げている。  
f) まず, “命令文および疑問文 [の語調]

を和らげる場合 (Bei Abschwächung von Befehls- und Fragesätzen) “

《バーゼル・ドイツ語の例》

- ・ *Diend* nit eso briele! (=Brülle nicht so!)  
„そんなに泣くなよ!“
- ・ *Due* di e bitzeli zämmenää! (=Nimm dich ein bisschen zusammen!)  
„少ししっかりしなさいね!“
- ・ *Diend* Si au esoo schwitze? (=Schwitzen Sie auch so?)  
„あなたもこんな風に汗をかいているの

ですか?“

- ・ Was *duesch* Guets koche? (=Was für Gutes kochst du?)  
„どんなおいしいものを料理しているの?“

ミュルーズ・アルザス語の例:

- ◆ *Tüet*’r dr’no glugse, wie-n-e Hühn? [Wil., S.69u.]  
(=Glückt er dann wie ein Huhn?)  
“じゃあ、彼はニワトリのようにクックツと鳴くのかな?“

g) 次いで “継続を示す書き換えのために (Zur Umschreibung von <ununterbrochen> “  
《バーゼル・ドイツ語の例》

- ・ Si *dien* nyt als frässe-n und suffe.  
(=Sie fressen und saufen nicht immer.)  
„彼らはいつも食ったり飲んだりしているわけではない。“

ミュルーズ・アルザス語の例:

- ◆ *Drum frog* ich das Biew’le, wu do *tüet* s[ch] *teh*. [Wil., S.24u.]  
(=Darum frage ich den kleinen Buben/Jungen, der da steht.)  
„それで私はそこにずっと立っていた小さな男の子に尋ねます。“

## 7-8. 動詞接頭辞

アルザス語には標準ドイツ語と異なる接頭辞を持つ動詞が存する。

### 7-8-1. 接頭辞 ver-

アルザス語を含めアレマン方言全域で最も代表的な接頭辞はver- であり、一般的には標準ドイツ語の er- に該当する。

1) **sich** *verkälte* (=sich erkälten): [Wil., S.264u.]

- ◆ **Kei Wunder, dass me sich d’rno *verkältet*.**



[Wil., S.92u.]

(=Kein Wunder, dass man sich danach erkältet.)

„あとで風邪を引いたとしても不思議はない。“

◆ **Eh be, bisch richtig verkälta!** [Tro., S.38]

(=... , [du] bist richtig erkältet.)

(= Eh bien, tu t'es vraiment refroidie.)

„そうだね。本当に風邪をひいているんだね!“

2) **verschrecke** (=erschrecken) : [Wil., S.181u./s. a.S.251u.]

◆ **Pletzlig verschreckt'r un sàit.:**

... [Wil., S.251u.]

(=Plötzlich erschreckt er und sagt: ...)

„突然彼は驚いて、... と言う。“

◆ **Ganz verschrocke nimmt d'r Bernard sine hand awàg.** [Wil., S.181u.]

(=Ganz erschrocken nimmt Bernhard seine Hand weg.)

„すっかり驚いてベルナールは自分の手をどけます。“

3) **verteile** (=erteilen) : [Wil., S.263o.]

◆ **Vor d'r Hochzittsnacht verteilt ihm sine Mame d' letschte Rotschleg.**

(=Vor der Hochzeitsnacht erteilt ihr [逐語的 ihm] ihre [逐語的 seine] Mutti die letzten Ratschläge.)

„新婚初夜の前に彼女のお母さんは彼女に最後のアドバイスをします。“

4) **vertrinke** (=ertrinken) :

◆ **Eyer Mann seig im Bach vertrunke?** [Wil., S.94m.]

(=Ihr [逐語的 Euer] Mann sei im Bach ertrunken?)

„あなたの旦那さん、小川で溺れ死んだのですって“

5) **verwache** (=erwachen) :

◆ **Ich verwach vorig, no de zehne.** [Wil., S.190u.]

(=ich erwache vorhin/soeben, nach zehn Uhr.)

„私はつい今しがた起きたばかりです。10時過ぎにね。“

6) **verwecke** (=er]wecken) : [Wil., S.73o./s. a.S.191o.]

◆ **... , dass ich absolut am halwer-sechse hitt Morge verweckt will wäre.** [Wil., S.190u.]

(=... , dass ich heute Morgen absolut um halb sechs geweckt werden will.)

„今朝は絶対に5時半に起こしてほしいと... “

7) **verwitsche** (=erwischen) :

◆ **Am andere Tag, wu s'Françoise in's Badzimmer kummt, so verwitscht's grad d'r Thierry.** [Wil., S.24o.]

(=Am anderen Tag, als Françoise ins Badezimmer kommt, so erwischt sie Thierry.)

„次の日、フランソワーズがバスルームに入っていくと、ティーリーを捕まえます。“

8) **verzehle** (Tro.では **verzähla**=erzählen) : [Wil., S.29m./s. a.S.45o./S.105m./S.133o./S.147o./S.181m./S.207u./S.268m./S.269o. 等]

◆ **Da nächste Witz hat uns d'r Chauffeur vum Bus verzehlt.** [Wil., S.209u.]

(=Den nächsten Witz erzählte uns der Busfahrer.)

„次のジョークをバスの運転手が我々に語ってくれた。“

◆ **Verzählsch m'r a G'schichtla?** [Tro., S.58u.]

(=Tu me racontes une histoire?/ Erzählst du mir eine kleine Geschichte?)

„僕に[短い]お話ししてくれる?“

9) **sich verzirne** (=sich erzürnen) :

◆ **Verzirnt Sie sich nit, Madam! Sie hat Rächt.** [Wil., S.160m.]

(=Erzürnen Sie sich nicht, Madam! Sie haben Recht.)

„マダム。怒らないでください！ あなたのおっしゃるとおりです。“

なおこのアレマン語の接頭辞 ver- は、一部、標準ドイツ語の zer- に該当する場合がある。

10) **Ich verbrich mir d'r Kopf, was ich ihre schänke kennt.** [Wil., S.114o.]

(=Ich zerbreche mir den Kopf, was ich ihr schenken könnte.)

„彼女に何をプレゼントできるのか、私は頭を悩ましている。“

7-8-2. 標準ドイツ語と異なるその他の動詞接頭辞

1) 標準語の aus|ziehen (服を脱がす) は南部アルザス語では異なった接頭辞を持ち、**ab|ziege** として現れる。なおバーゼル・ドイツ語でも短縮形 **ab|zie** となっている。

◆ **Tommy, was machsch? — Ich zieg mi ab.** [Tro., S.58m.]

(=Tommy, que fais-tu? — Je me déshabille./=... Ich ziehe mich aus.)

„トミー、何してるの? — 僕、服を脱いでいるんだ。“

◆ **Wu d'r Arthur im Bett ligt, kummt sine Frau in s'Schlofzimmer un ziegt sich ab.** [Wil., S.265 o.]

(=Als Arthur im Bett liegt, kommt seine Frau ins Schlafzimmer und zieht sich aus.)

„アルトゥアがベッドで横になっていると、彼の妻が寝室に入ってきて服を脱ぎます。“

◆ **Wohl oder iwel muesst sich die Dame abziege.** [Wil., S.54m.]

(=Wohl oder übel muss sich die Dame ausziehen.)

„いやおうなしに、その女性は服を脱がねばなりません。“

2) 標準語の口語でよく用いられる [bei<sup>+3</sup> ~] **vorbei|kommen** (立ち寄る、訪ねる) も異なった接頭辞を持ち、**dure|kumme** (Tro. では **dura|kumma**) として現れる。

例 :

◆ **Güet, ich kumm gega da Zwelfa dura.** [Tro., S.37u.]

(=Bien, je passerai vers midi./ =Gut, ich komme gegen zwölf Uhr vorbei.)

„わかりました。12時頃に伺います。“

◆ **Herr Dokter, kumme sofort bi mir dure!** [Wil., S.65o. | s.a. S.42m.]

(=... *kommen* Sie sofort *bei* mir *vorbei*!)

„先生、すぐに家に来て (寄って) 下さい!“

7-8. 動詞の時制

アルザス語はいわゆる“過去時制線 (Präteritalgrenze)”の南方にあるために、ゲルマン語古来の総合時制としての過去 (Präteritum) を消失した。warのみを保持するバイエルン=オーストリア方言とも異なり<sup>14)</sup>、一般にアレマン語では **si, seh** (=標準ドイツ語 *sein*) や **han** (=標準ドイツ語 *haben*) といった基礎的な重要動詞に関しても該当し、したがって標準ドイツ語の war や hatte にあたる直接法の語形は存在しない。つまり過去は完了形式 (ha/si...+過去分詞) で示される。(もちろん標準ドイツ語の現在完了も同じ形式によって表現されるが。) また過去完了はいわゆる“二重完了” (**ha/si ... +過去分詞 + gha/gsi**)

によって示されるが、Willenbucher ではその頻度は極めて低く (Troxler-Lasseaux では皆無)、用例を探し出すこと自体難しかった。

## 7-8-1. 一般動詞の例

1) 過去時制の代用としての“完了形式 (sin/han ... + P.P.) „

- ◆ **Ich bin mit unserem Regimànt bi Sedan g'lage, i'me kleine Waldele.** [Wil., S.130u.]  
(=Ich lag mit unserem Regiment bei Sedan, in einem kleinen Wald.)  
„私は我々の連隊とともにセダン近郊のある小さな森に潜んでいた。“

2) 過去完了時制の代用としての“二重完了, 構文 (han/si ... + P.P. +gha/gsi) “

- ◆ **Ich han g'meint g'ha, mine letschte Stund hat g'schlage.** [Wil., S.130u.]  
(=Ich hatte gemeint, meine letzte Stunde hat geschlagen.)  
„私は自分の最期の時が告げられた (= 来た) と思ったね。“

## 7-8-2. si/seh (=sein) と han (=haben) の例

1) 過去時制の代用としての”完了形式 (sin/han ... P.P.) “

- ◆ **Wenn dà d'r Hüeschte g'ha hat, so isch'r gange ...** [Wil., S.67o.]  
(=Wenn der den Husten hatte, so ging er ...)  
„彼は咳をするたびに出て行って... “

なお過去分詞は (一部の例外を除き) 一般に動詞語幹の前後に、弱変化動詞では **g-\_\_\_-t** を、強変化動詞では **g-\_\_\_-e** (またはTro では **g-\_\_\_-a**) を付加して造るとされているが、弱変化動詞の中で語幹末の子音が **-t** あるいは **-d** で終わるものに関しては、いわゆる”口調を整える **-e-[ə]**” (Tro では表記は **-a**

[ə]) は残存するものの、語末の語尾 **-t** は脱落する。これは共時的観点からみた場合、強変化へ移行したとの説明も可能であり、事実 Noth (S.318, §16) などはそのように説明している。

- ◆ **Im Roland si Tochter hat e Veterinär g'hirote.** [Wil., S.78 o. | s.a. S.26/S.91/S.96/S.103/S.109/S.153/S.251]

(= Rolands Tochter hat einen Veterinär geheiratet.)  
„ローラントの娘は獣医と結婚した。“

- ◆ **Se hat awer so geblüete, dass ich ihre d'r Gnadeschuss hat miesse gäh.** [Wil., S.89u.]

(=Sie hat aber so geblutet, dass ich ihr den Gnadeschuss hat geben müssen.)  
„彼女はしかし、私がとどめの一発を与えずにはいられなかったほど、ひどく血を流していた。“

- ◆ **Wu d'Maschine dr'no in Paris g'lande isch, so ...** [Wil., S.211o.]

(=Als die Maschine daraufhin in Paris gelandet ist, so ...)  
„飛行機がそのあとパリに到着した時、...

- ◆ **Im Minschtertal hat sich d'r Herr Schulze ... e Nàwesresidenz gleichte.** [Wil., S.219m.]

(=In Münstertal hat sich Herr Schulze ... eine Nebenresidenz geleistet.)  
„ミュンスターの谷でシュルツェ氏は... 宮殿別館を思い切って購入した。“

- ◆ **Jedesmol, wenn ich d'r 42/32/31 verlangt han, so hat sich d' Gasfawrik g'mälde.** [Wil., S.248o.]

(=Jedes Mal, wenn ich die [Nummer] 42/32/31 verlangt habe, so hat sich die Gas-fabrik gemeldet.)  
„私が42/32/32の番号を呼び出すたびに、ガス会社が電話に出るんだ。“

◆ **Alle Blicke *sin* jetz uf d'r Francis *g'richte*.**  
[Wil., S.250.]

(=Alle Blicke sind jetzt auf François gerichtet.)

„皆の視線は今やフランソワに向けられている。“

◆ **Häsch d'Valise *g'rischte*?** [Tro., S.90o.[s. a.S.44/S.91]

(=Hast du den Koffer vorbereitet/zugerüstet?)

(=Tu as préparé les valises?)

“旅行鞆 (=スーツケース) の準備はできた?”

◆ **Die han in d'r Kuche Hiener *gezichte*!** [Wil., S.100u.]

(=Die haben in der Küche Hühner gezüchtet!)

„あの人たちはキッチンでニワトリを飼育していたんだ!“

◆ **..., dass da Kittel nimm *abgebirschte* wore isch**,... [Wil., S.100u.]

(=..., dass der Kittel nicht mehr abgebürstet worden ist, ...)

„仕事着はもうブラッシングされなかったということ...“

◆ **Do wird igshränkt, d'r Mittwoch *isch üsgschalte*!** [Wil., S.62m.]

(=Da wird eingeschränkt, der Mittwoch ist ausgeschaltet!)

„それなら節制しなさい。水曜日はやめるべきです!“

◆ **Bisch richtig *verkälta*?** [Tro., S.38u.]

(=Bist du richtig erkälte?)

„本当に風邪をひいたのかい?“

ただし例外もある。たとえば **rede** (=reden) は語源的に標準ドイツ語と同様に弱変化であるにもかかわらず過去分詞は **gredt** (=geredet) となっており, \*grede ではない。

例:

◆ **Awer während d'r Predig hat d'r Pfarrer ständig vum <Jésus et sa grande Clémence> *gredt*.** [Wil., S.96o.]

(=Aber während der Predigt hat der Pfarrer ständig vom <Jesus und seiner großen Gnade / Jesus und seiner ältesten Tochter Clemens> *geredet*.)

„でも説教の間中牧師さんはずっと<イエスとその長女クレメンズ>(本来の意味: イエスとその大いなる慈悲)>のことを話していたよ。“

◆ **Schu güet, *g'redt* wird vil, awer bewise kat mir's keiner.** [Wil., S.204u.]

(=Schon gut, *geredet* wird viel, aber beweisen kann mir's keiner.)

„まあいいさ。いろいろといわれているけど、誰も私にそのことを教えてくれないんだ“

また, **bauje** (=bauen) は過去分詞として **gebauje** (=gebaut) という語形で現れるが, これはミュルーズのアルザス語では強変化へ移行したと捉える事が出来るかもしれない。

◆ **Usserdäm han ich *scheenere* Brisch as Ihr, un bin nätter *gebauje*.** [Wil., S.249u.]

(=Außerdem habe ich schönere Brüste als Sie und bin netter *gebaut*.)

„そのうえ私の方があなたよりキレイなおっぱいだし, 性格ももっといい。“

7-9. 話法の助動詞の過去分詞の形態(南部低地アレマン方言に共通)

標準ドイツ語では話法の助動詞が他の動詞の不定詞を伴わず本動詞として用いられる場合に, その過去分詞は gewollt, gekonnt, gemusst 等になるが, 南部低地アレマン方言, すなわちライン左岸のアルザス南部, ライン右岸のドイツ領ブライスガウ地方, さらにス

イスのパーゼルでも、この場合に代用不定詞 (Ersatzinfinitiv), つまり **welle, kenne, müesse** 等となる。

例:

◆ **Natirilig Madam, Sie hat sogar e grosse Packung welle!** [Wil., S.73u.]

(=Natürlich Madam, Sie haben sogar eine große Packung gewollt.)

„もちろんです。奥様。あなたはそれどころか大きいパックをお望みでしたね!“

◆ **Was hat'r denne welle, dà Herr?** [Wil., S.186o.]

(=Was hat er denn gewollt, der Herr? または Was wollte er denn?)

„あの男性のお客様は、いったい何をお望みだったのかね?“

## 7-10. 完了時制における助動詞の過去分詞

(=代用不定詞) の語順に関して—

主文と副文 (従属文) におけるいわゆる動詞複合体において、不定詞と同形の助動詞の過去分詞, すなわちいわゆる代用不定詞 (Ersatzinfinitiv) は、例外はあるものの (Wil., S.269 o.: ... mache kenne.), 標準ドイツ語と異なり本動詞の不定詞の前に置かれるのが低地アレマン方言としては一般的である。

例:

◆ **Van dàm han ich noch nie heere reede!** [Wil., S.178o.]

(=Von dem [=Mousorgski] habe ich noch nie reden hören.)

„ムソルグスキーについての話はまだ一度も聞いたことがないな!“

◆ **Da<sup>4</sup> han mir hitt Morge losse kepf.** [Wil., S.39m.]

(=Den haben wir heute Morgen köpfen lasen.) ]

„そいつ (=ルイ16世) の首は今日の朝は

ねさせたよ。“

◆ **D'r Charlele hat e Ufsatz miesse mache iwer d'Arweiter.** [Wil., S.36o.]

(=Karl hat einen Aufsatz über die Arbeiter machen müssen.)

„シャルルは労働者に関する論文を書かねばなりませんでした。“

◆ **Se hat awer so geblüete, dass ich ihre dr Gnadeschuss han miesse gäh.** [Wil., S.89u.]

(=... so geblutet, dass ich ihr den Gnaden-schuss habe geben müssen.)

“しかし彼女は私が止めの一発を与えねばならないほど出血がひどかった。“

◆ **mit ... e Rock, wu sich nur e Star hätte kenne leische...** [Wil., S.117m.]

(=mit/in ... einem Rock, den sich nur ein Star hätte leisten können.)

„スターだけが手に入れることができるようなスカートを身につけて“

## 7-11. 話法の助動詞の接続法 2 式不定詞の存在 (南部低地アレマン方言に共通)

Philipp/Bothorel-Witz (S.327) はコルマル方言には標準ドイツ語とは異なり話法の助動詞の接続法 2 式に不定詞があると述べており、次の用例を挙げている。

《コルマル方言》

・ Wänn's wärmer gsi wär, hàtsch im Hoft kennte spiele.

(=Wenn es wärmer gewesen wäre, hättest du im Hof spielen können.)

“もっと暖かくなっていたら、中庭で遊ぶことができたでしょうに...”

この点に関してライン対岸ドイツ領のカイザーシュトゥール (Kaiserstuhl) 地方の方言を記述したNoth (S.330) は, *sollen* と *wollen*



においては頻繁に, können においては稀に接続法2式の語形が *ich hádd soda/wodá/gheendá* (文字通りでは: *ich hätte sollte/wollte/könnte* に該当)のごとく二重に用いられることを指摘していると共に, 次ページには以下の用例が挙げられている。

《Oberrotweil 方言》

- ・ Mr *háddi-di soda* ín d Reaalschuál schíggá! [Noth, S.331u]  
(=Wir *hätten* dich zur Realschule schicken *sollen*.)  
“我々はお前を実科学校へ行かせるべきだった!”

さらに Breisgauer Alemannische Kurzgrammatik (S.3/13) にも説明はないものの同様な用例が確認される。

《ブライガウ方言》

- ・ Si *hätte-n-em sotte* ebis mitbringe.  
(=Sie *hätten* ihm etwas mitbringen *sollen*.)  
“あなたは彼に何かを持ってくるべきでした。”

さて, ミュルーズ・アルザス方言の用例では, 過去分詞の代用としてのいわゆる代用不定詞 (Ersatzinfinitiv) に限られているようで, 6つの話法の助動詞の内, **sodde** (=nhd. sollte), **kennte** (=nhd. könnte) は Kaiserstuhl 方言と同様に見出されたが, それぞれわずかに2例づつにすぎない。**wodde** (=wollte) の例は偶然かもしれないが見出されなかった。ただその代わりに **miesste** (=nhd. müsste) の存在も1例のみ確認できたが, ことによると **miesse** (=müssen) の誤植の可能性もありうる。なお **sodde**, **wodde** という語形は, 中高ドイツ語の sollte, wollte の別形の solde, wolde に基づき, 逆行同化により -ld->-dd- となったものであろう。

例:

- ◆ **Dà [Timbre] hätte ich uf dà anonyme Schandbrief sodde kleiwe.** [Wil., S.32o.]  
(=Die [Briefmarke] *hätte* ich auf den anonymen Schandbrief kleben *sollen*.)  
„切手を匿名の中傷する手紙に貼っておくよう言われてたよね。”
- ◆ **Das hätte Se sodde sàh, Herr Dokter.** [Wil., S.245o.]  
(=Das *hätten* Sie *sehen* sollen, Herr Doktor.)  
„その様子を, 先生にも見てほしかったですね。”
- ◆ **Jetzt hätte ich e Paar [Strimpf] kennte stricke!** [Wil., S.243u.]  
(=Jetzt *hätte* ich ein Paar stricken *können*.)  
„今なら一足[の靴下]を編むことができたでしょうに...”
- ◆ **Das einte Mol hätte mir ... kennte brüche!** [Wil., S.249o.]  
(=Das einzige Mal *hätten* wir ... brauchen *können*!)  
„そのたった一度[のチャンス]を私たちは使うことができたじゃないの!”
- ◆ **Sunscht hätte mir's miesste mache.** [Wil., S.266o.]  
(=Sonst *hätten* wir's machen *müssen*.)  
„さもないと私たちはそうしなければならなかったことでしょう。”

## 7-12. 標準ドイツ語とは異なる”zu 不定詞”の用法

1) アルザス語の動詞 **brüche** または **bruche** (=nhd. brauchen) は, ドイツ語の日常語 (Umgangssprache) や他の多くの方言と同様に一般に zu を伴わない不定詞と共に用いられる。

①否定詞 **nít** (=nhd. nicht) と共に:

- ◆ **Awer Mamsell Hortense, so witt brucht**  
**Se s'Mül nit ufmache!** [Wil.,S.48u.|s.  
a.S.209o.]

(=..., so weit *brauchen* Sie das Maul/den  
Mund aufzumachen!)

“あのね、ホルテンセさん。そんなに大  
きく口を開かなくてもいいんですよ！”

- ◆ **Wägädäm brüche Ihr nit so brielle wie-  
n-e Muni.** [Wil.,S.40u.|s.a.S.76u./S.196u.]

(=Deswegen *brauchen* Sie nicht so zu brül-  
len wie ein Stier.)

“なので、牛のように大声で喚かなくて  
もいいんですよ。”

②否定冠詞 **kei** (=nhd. kein) と共に：

- ◆ **Brüschsch kei Angscht ha.** [Wil.,S.275m.]

(=[Du] *brauchst* keine Angst zu haben.)

„心配しなくてもいいわよ。”

③副詞 **nur** と共に：

- ◆ **M'r brucht nur d'Tischdecke betrachte.**

[Wil.,S.211u.|s.a.S.28o.]

(=Man *braucht* nur die Tischdecken zu be-  
trachten.)

“テーブルクロスをよく見てさえすれば  
いいんだよ。”

2) 標準ドイツ語で目的を示すために用いら  
れる “um ... +zu 不定詞” は、アルザス語を  
含むアレマン方言で一般に “**fir ... +z' 不**  
**定詞**” となる<sup>(注)</sup>。

①一般的な例：

- ◆ **Ich sammel Holz, fir mine Stuwe z'  
wärme.** [Wil.,S.45u.|s.a.S.67u./S.144o.  
usw.]

(=Ich sammle Holz, um meine Stuben zu  
wärmen.)

“部屋を暖めるために私は薪を集めてい

るんです。”

- ◆ **Grad kumm'i vum Notari, fir mi Te-  
schtamànt z' mache.** [Wil.,S.193o.|s.  
a.S.46m./S.67u./S.119m. usw]

(=Gerade komme ich vom Notariat, um  
mein Testament zu machen.)

“遺言書を作成するために行っていた公  
証人役場からちょうど戻ってきたばかり  
です。”

②なお “**fir ... z'** 不定詞” 構文で、助動詞  
も共に用いられている例はWil. において  
はわずかに3例のみ見出されるにすぎない  
が、助動詞の位置については標準語と  
異なる点に注意を向ける必要がある。す  
なわちミュルーズ・アルザス語では **z'**  
(=nhd. zu) は本動詞の不定詞の前に付加  
されており、標準ドイツ語のように助動  
詞の前ではない。

- ◆ **..., fir billig in d'Ferie kenne z'geh.**  
[Wil.,S.95o.]

(=..., *um* billig in die Ferien gehen zu kön-  
nen.)

“安く避暑地へ行くことができるよう...”

- ◆ **S'Finnele geht zum Dokter, fir sich  
z'untersüeche lo.** [Wil.,S.63o.]

(=..., *um* sich untersuchen zu lassen.)

“フィネレは診察を受けるために医者へ  
行きます。”

ただ、下記の第3の例は **z'** (=nhd. zu) が本  
動詞と助動詞のそれぞれの不定詞の前に置か  
れており、二重となっている。もちろんこ  
うしたことは標準ドイツ語ではありえない。  
(但しことによると誤植の可能性もある)。

- ◆ **S'Alice müess uf s'Gricht, fir als Ziege  
z'vernumme z'wärde.** [Wil.,S.46m.]

(=Alice muss auf das Gericht, *um* als Zeuge

vernommen zu werden.)

“アリスは証人として尋問を受けるために裁判所へ行かなければなりません。”

③ *z'* の脱落した用例：

明らかに誤植と思われる以外にも不定詞に先行する *z'* が脱落している用例がかなりあり、それらすべてを“誤植”と簡単に解釈してしまうのは危険である。フランス語訳が付いたTroxler-Lasseaux のテキストの以下の2例がこれに関してヒントを与えてくれている。

例：

◆ **Was brüchsch fir d'r Teig mâcha?**

[Tro.,S.50u.]

(=仏語訳：Que te faut-il pour faire la pâte?)

(=独語訳：Was brauchst du, um den Teig zu machen?)

“パン生地を作るためには何が必要なの？”

◆ **Süech d'Sâcha, wu-n-r nit brücht fir in Feria geh.** [Tro.,S.94o.]

(=仏語訳：Cherche les objets dont il n'a pas besoin pour partir en vacances.)

(=独語訳：Suche die Sachen, die er nicht braucht, um in die Ferien zu fahren.)

“休暇旅行へ出かけるために、彼には必要のないものを探さない。”

上記の例から分かることだが、フランス語の目的を示す前置詞 *pour* はアルザス語では意味的、そしておそらくは語源的・形態的にも対応する *fir* (=nhd. für) で置き換えられているのみならず、それぞれの言語にとって本質的な語順はさておき、他の語句もそのままフランス語に倣った表現となっている。すなわち、“休暇旅行へ出かける”を意味する標準ドイツ語では“in die Ferien fahren”のよう

に定冠詞と共に用いられているのに対し、アルザス語ではフランス語の *en vacance* に倣い無冠詞の *in Feria* となっているなど逐語的な訳文と言えよう。したがってこのようなケースでは *z'* (=nhd. zu) は入る余地はなく、標準ドイツ語の“*um ... zu* 不定詞句”とは異なった構造を取る結果になったと推測できる。

では Willenbacher ではどうであろうか。次に述べる“余剰の *fir* の14例を除外すると、標準ドイツ語の“*um ... zu* 不定詞句”に該当するアルザス語の“*fir ... z'* 不定詞句”の例は53例であるに対して、*z'* のないものはわずかに5例でしかなかった。

例：

◆ **Ich schlag vor, dass Ihr mit Eirem Mann no Lourdes fahre, fir dert e Kerze geh azinde.** [Wil.,S.184u.]

(=..., dass Sie mit Ihrem Mann nach Lourdes fahren, um dort eine Kerze anzünden zu gehen.)

“蠟燭を灯しに行くために、旦那さんと一緒にルルドへ巡礼に行く（＝ろうそくの火を灯しにいく）というのはいかがでしょう。”

◆ **Ich halt dra, fir kenne schwimme.** [Wil.,S.101o.[s.a.S.181o.]

(=Ich halte dran, um schwimmen zu können.)

“泳げるようになるために、私は急いでいるのです。”

◆ **Heer Seppele, dü bisch z'alt, fir mit mir in mim Bett schlofe.** [Wil.,S.280o.]

(=Hör Seppele, du bist zu alt, um mit mir in meinem Bett zu schlafen.)

“いい、セッペレ。もう大きくなったのだから、ママとは同じベットで寝れないのよ。”

◆ **S'geht ein zum Roesch André, fir sich e Zahn lo ziege.** [Wil.,S.59o.]

(=Es geht einer zu R.A., um sich einen Zahn ziehen zu lassen.)

“歯を抜いてもらうため、ある人が [歯医者] レシュ・アンドレのところへ行きます。”

これも第二次世界大戦後のアルザスの再々度のフランス帰属後にはほぼ一世代に亘ってフランス中央政府が取ってきたドイツ語およびアルザス語への強力な弾圧政策により、“屋根”すなわち規範としての標準ドイツ語を奪い取られたことによる最近のアルザス語の“崩れ”，すなわち変容の一現象なのであろうか。

④ 余剰の“**fir**”を伴う **z' 不定詞句**

標準ドイツ語では先行する名詞を修飾する zu 不定詞句のいわゆる形容詞的用法では前置詞 um を必要としないが、アルザス語ではこの場合でも前置詞 **fir** (=nhd. für) を取ることが珍しくはない。Willenbacher では総計14例を見出すことができた。

例：

◆ **Ich bin nämlich nimm im Stand, fir Auto z'fahre.** [Wil.,S.155o.]

(=Ich bin nämlich gar nicht imstande, Auto zu fahren.)

“というのも車を全く運転できないので。”

◆ **Ich weiss, dass ich kei Chance han, fir dà Prozäss z' gwinne.** [Wil.,S.81o.|s.a.S.187o.]

(=Ich weiß, dass ich keine Chance/Gelegenheit, den Prozess zu gewinnen.)

“私には裁判に勝つチャンスがないことを知っています。”

◆ **Jeder weiss e Mittele, fir sicher kenne z'lande.** [Wil.,S.125m.|s.a.S.175o.]

(=Jeder weiß ein Mittel, sicher landen zu können.)

“誰もが安全に着陸できる方法を知っている。”

◆ **Natirlich han ich noch Courage, fir dir in d'Auge z' lüege.** [Wil.,S.189m.]

(=Natürlich habe ich noch Courage/Mut, dir in die Augen zu sehen.)

“もちろん僕にはまだ君の眼を見つめるだけの勇氣はあるよ。”

さらに、標準ドイツ語の名詞的用法の“zu 不定詞句”も、アルザス語においては“**fir** ... **z'** 不定詞句”で置き換えられている例が Willenbacher に4例だけ見出されている。

◆ **D'r Dokter isch grad d'rbi, fir ihm d'r Puls z' mässe.** [Wil.,S.53m.]

(=Der Doktor/Arzt ist gerade dabei, ihm den Puls zu messen.)

“医者はちょうど彼の脈を測っている/測ろうとするところです。”

◆ **Awer s'isch jo Eier Amt, fir d'Tote z'vergrawe.** [Wil.,S.172m.]

(=Aber es ist Ihr Amt, die Toten zu vergraben.)

“しかし、死者を埋葬するのがあなたの職務なのです。”

◆ **Hasch doch frei verlangt, fir an's Begräbniss vu dim Brüeder z' geh!** [Wil.,S.173m.]

(Hast du doch frei verlangt, ans Begräbnis von deinem Bruder zu gehen!)

“兄弟の葬儀に行くことを遠慮もなしに求めたのですか？”

◆ **D'rno han ich mich entschlosse, fir z' Füess heime z' geh.** [Wil.,S.242o.]

(=Dann habe ich mich entschlossen, zu Fuß nach Hause zu fahren.)

“それで私は歩いて帰宅すると決めたの

です。”

# 注

- 1) フィリップス『アルザスの言語戦争』326頁
- 2) 仏語 *alsacien* / 独語 *Elsässisch*
- 3) 独語名称はシュトラースブルク (Straßburg)
- 4) 独語名称はミュールハウゼン (Mühlhausen)
- 5) フィリップス『アルザスの言語戦争』20頁
- 6) なお、この数年の間、スイス・ドイツ語方言 (ほとんどが高地および最高地アレマン方言)、とりわけチューリッヒ方言の言語的特徴の記述・紹介に取り組んできた経過から、方言区分上では同じアレマン方言に属するアルザス語 (こちらは低地アレマン方言が主体) の言語記述を行う際にこれまでの積み上げてきた経験と種々の収集資料が非常に役に立ち、ヴィレンブーハー (Willenbacher) の “Lachkür” (「笑選、ジョーク集」とでも訳せようか) 等のアルザス語文献を、完璧には及ばざるものの予期した以上に読みこなせたのは大きな喜びであった。
- 7) アルザス・ワイン街道 (Route du vin) : 北はストラスブール西部の Marlenheim 村を起点とし、南はミュルーズ西部の Thann の町まで続く全行程約120キロの街道。(蔵持 不三也 編『フランス・国境の地アルザス』, 98頁～117頁を参照)
- 8) 独語名称はハーゲナウ (Hagenau) であり、12～13世紀のシュタウフェン朝時代には神聖ローマ帝国の王宮が建築されたが、30年戦争中にフランス軍により破壊された。なおこの地の出身の宮廷詩人として、中世ドイツ最大の宮廷抒情詩人ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデの師であり、12世紀末にバーベンベルク家のウィーンの宮廷で活躍したラインマール・フォン・ハーゲナウがいる。
- 9) 独語名称はヴァイセンブルク (Weissenburg) であり、この地出身の特記すべき人物としては、9世紀中頃 (860年頃) に聖書をラテン語訳から古高ドイツ語の韻文に翻案したオットフリート・フォン・ヴァイセンブルク (Otfrid von Weissenburg) がいる。
- 10) 独語名称はツァーベルン (Zabern)。20世紀初頭の1913年、プロイセン＝ドイツ帝国領の時代にこの町で起きたプロイセン駐屯軍将校と市民との間に生じた騒動は、ドイツ側のアルザス人蔑視を白日に晒した事件としてアルザス人の記

憶に残る。

- 11) s. Keller 1961, S.119.
- 12) 詳細は市村卓彦『アルザス文化史』, 56. および293. を参照
- 13) 起源的には強変化動詞の Ablaut (母音交替) 系列の6種および7種に属するもの。
- 14) 例えば Ludwig Gruber の有名なウィーン歌曲。 „Mei Muatterl war a Weanerln“

# 参考文献

- I. 一次文献 (低地アレマン方言 [特に上部ライン・アレマン諸方言] 関係)
- A. 欧文文献 :
  - Finck, Adrien: „Elsässische Literatur - 20. Jahrhundert“, Strasbourg (Édition SALDE) 1990
  - Keller, R.E.: „German Dialects — Phonology and Morphology with selected Texts“, Manchester University Press 1961 {第四章で北部アルザス語のバール (Barr) 方言を記述/但しテキストはストラスブール方言}
  - Lösch, Hellmut: „Zweisprachigkeit in Elsass und Lothringen — gestern, heute und auch morgen? Versuch einer Bilanz“, Wien (Edition Praesens) 1997
  - Philipp, Marthe/Bothorel-Witz: Low Alemannic. {コルマール方言を記述} (In: Russ, Charles: „The Dialects of Modern German“, Stanford University Press 1989)
  - Schwarz, Christian: Die „tun“-Periphrase im Deutschen — Gebrauch und Funktion. Saarbrücken (VDM Verlag Dr. Müller) 2009
  - Suter, Rudolf: Baseldeutsch-Grammatik. Basel (Christoph Merian Verlag) 1976  
Baseldeutsch-Wörterbuch. Basel (Christoph Merian Verlag) 1984
  - Troxler-Lasseaux, Sylvie/Nouvelle, Catherine/Schmitt-Troxler, Evelyne: J'apprends l'alsacien avec Tommy et Louise. Éditions du Bastberg 2003 {ミュルーズ方言のCD付学習書 [絶版]}
  - Weiss, Raoul J. Niklas: Elsässisch-die Sprache der Alemannen. Bielefeld (Reise Know-How Verlag) 2001
  - Werner, Robert: „Tomi Ungerer en alsacien: Die drei Raiwer“ Strasbourg (La Nuée Bleue) 2008 {アルザスの生んだ人気絵本作家のストラスブール



方言訳 [絶版]

Willenbacher, Freddy: D'Làchkür vum Profässer  
Fläscheputzer

— sine 500 beschte Witz. Strasbourg (Éditions La  
Nuée Bleue) 2003

{ミュルーズ・アルザス語によるアルザス語  
ジョーク集}

Zeidler, Edgar/Crévenat-Werner, Danielle: Orthographe  
alsacienne — Bien écrire l'alsacien de  
Wissembourg à Ferrette. Jérôme Do Bentzinger  
Editeur 2008

{アルザスにおける各種のドイツ語系方言の音韻  
およびそれに基づく書記法を媒介とした形態  
を知る上で有益な書。CD付。}

## B. URL

### 1) 専門書

・Baßler, H. & Spiekermann, H.: „Alemannische  
Grammatik”

([http://fips.igl.uni-freiburg.de/~helmut/Luzern/  
grammat.html](http://fips.igl.uni-freiburg.de/~helmut/Luzern/grammat.html))

・Hartweg, Frédéric: „Die Sprachen im Elsass: Kalter  
Krieg oder versöhntes Miteinander?“

([http://www.hss.de/downloads/argumente\\_  
materialien\\_35.pdf](http://www.hss.de/downloads/argumente_materialien_35.pdf))

・Noth, Harald: „Alemannisches Dialekthandbuch  
vom Kaiserstuhl und seiner Umgebung — eine  
Kaiserstühler Alemannische Sprachlehre auf  
der Grundlage der Mundart von Oberrotweil“,  
Freiburg i.Br. 1993

・Verein zur Förderung der Landeskunde an Schulen  
e. V (Hrsg.v.): „Breisgauer Alemannische  
Kurzgrammatik“, Freiburg 1996

([http://www.noth.net/m11\\_kurzgrammatik.htm](http://www.noth.net/m11_kurzgrammatik.htm))

### 2) 一般向け

・Alemannischkurs {フライブルク郊外の Tuniberg の  
方言を在住邦人が記述}

([http://alemannisch.fc2web.com/alemannisch/  
index0.html](http://alemannisch.fc2web.com/alemannisch/index0.html)) [現在休止中]

・„Elsässerdeutsch“ aus Wikipedia, der freien  
Enzyklopädie.

{フランス・アルザス側のセレストア方言とドイ  
ツ・バーデン側のカイザーシュトゥール方言  
の同一内容の短文での比較あり}

([http://de.wikipedia.org/wiki/Els%C3%A4ssische\\_  
Sprache](http://de.wikipedia.org/wiki/Els%C3%A4ssische_Sprache))

## II. 二次文献（高地アレマン方言 [スイス・ドイ ツ語を含む] 他）

### A. 欧文

Dörig, Urs „Schweizerdeutsch für alle — Die  
1000 wichtigsten Wörter plus Redensarten —  
Kommentare — Witze. Buchs (Sidus-Verlag)  
2004

Gerdes/Spellerberg: Althochdeutsch — Mittelhoch-  
deutsch — Grammatischer Grundkurs zur  
Einführung und Textlektüre. Königstein/Ts.  
(Athenäum Verlag) 1978<sup>4</sup>

König, Werner: dtv-Atlas Deutsche Sprache. München  
(Dt. Taschenbuch verlag) 2005<sup>15</sup>

Löffler, Heinrich: Germanische Soziolinguistik. Berlin  
(Erich Schmidt Verlag) 1985<sup>2</sup>

Meyer, Kurt: Schweizer Wörterbuch — So sagen wir  
in der Schweiz. Frauenfeld/Stuttgart/Wien (Verlag  
Huber) 2006

Sitzler, Susann: Aus dem Chuchichäschtl geplaudert  
— Das ultimative Sprachlexikon für die Schweiz.  
Zürich/München (Pendo Verlag) 2008

Weinhold-Ehrismann-Moser: Kleine mittelhoch-  
deutsche Grammatik. Wien-Stuttgart 1972.

### B. 邦文文献

ウージェーヌ・フィリップス（右京頼三 訳）『ア  
ルザスの言語戦争』（白水社 1994年）

金子 亨『アルザス語の現在』„ドイツ語研究 1（ク  
ロノス 1985）“ 所収

河崎 靖『ドイツ方言学 — ことばの日常に迫  
る』（現代書館 2008年）

蔵持 不三也 編『フランス・国境の地アルザス』  
（社会評論社 1990年）

須澤 通・井出 万秀『ドイツ語史 — 社会・文化・  
メディアを背景として』（郁文堂 2009年）

田中 泰三『スイスのドイツ語』（クロノス 1985  
年）

中本 真生子『アルザスと国民国家』（晃洋書房  
2008年）

フレデリック・オッフエ（右京頼三 訳）『アルザ  
ス文化論』（みすず書房 1987年）